

30353 ✓

教科書文庫

3
810
42-1899
20000 89511

M32.  
1899

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

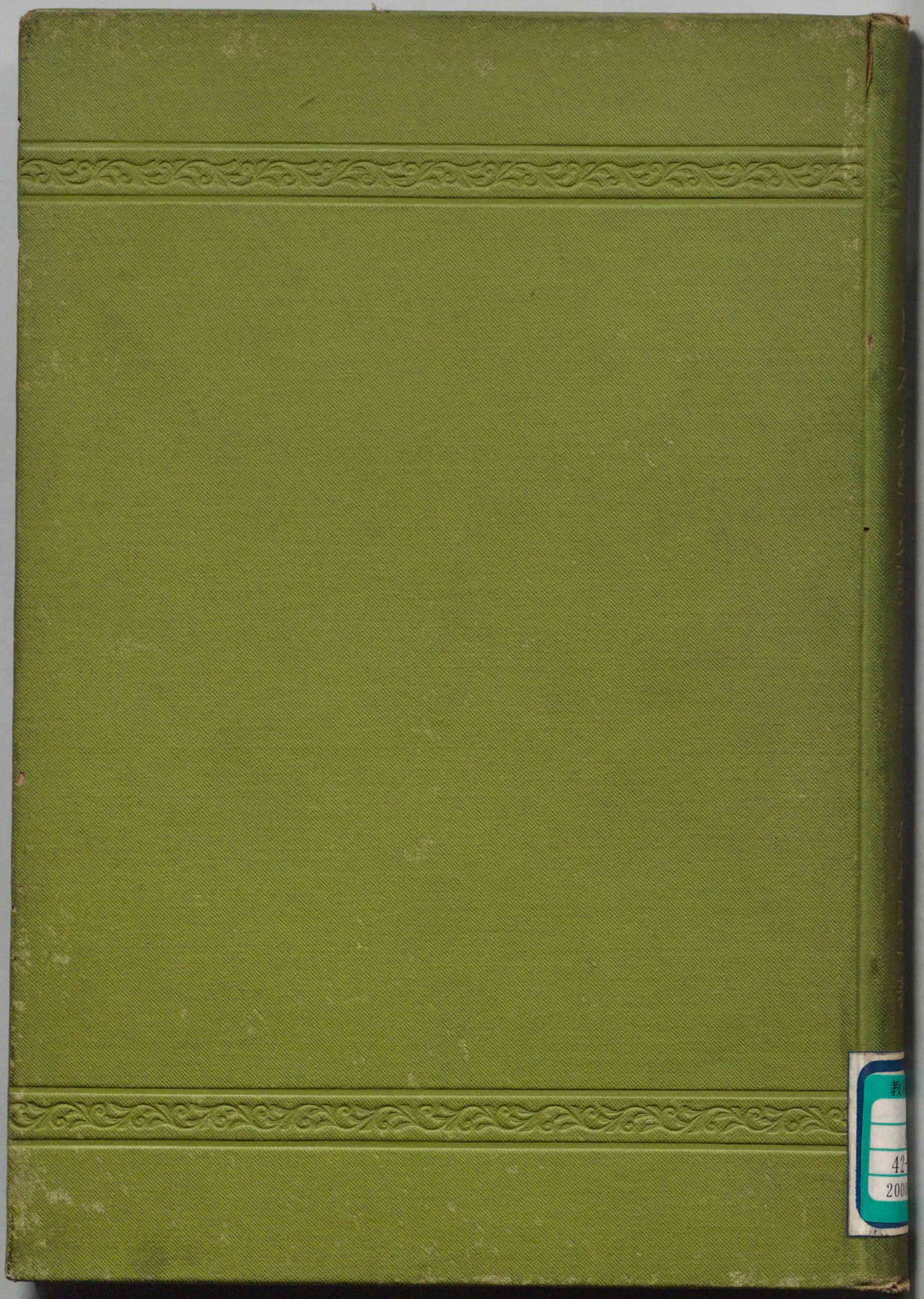
inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

**Kodak Color Control Patches**

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教

42
2000



教育学科  
資料室

教科書文庫  
3  
810  
42-1899  
2000089511

4a  
810  
明36

明治三十三年二月十六日  
文部省檢定濟

文學士佐々政一著



# 日本文學史要

全

東京 内外出版協會



広島大学図書

2000089511



# 日本文學史要

## 緒言

一、此書は、著者が第二高等學校に在りて、日本文學史を教授する傍、略、文部省の國語科教授細目に準憑して、其大要を摘記し、中等教育の教科書となさんとしたるものなり。

一、從來此種の著書二三ありと雖も、或は雅文、雅歌等に煩にして、近古の時代文學に簡に、或は文學全體の時代的變遷に専らにして、其部分的變遷、即ち各種の文體の變遷を遺却したるに似たり。故に著者の最も注意せしは、此點を補はんとするに在りき。されど、かの細目に規定したる、僅々十時の間に、完全なる文學史を教授せんことは、望み得べきことに非ざれば、私意を以て、ことさらに取捨せる所、時に輕重大小を失したることなきを保せず。乃ち卷尾に、文體の變遷及び時代文學の大要を表示して、教師が書中の某項を省略し、或は某節を敷衍することありとも、全體の變遷を知了するには、妨げなからんことを期す。

一、書中の實例は、參考の爲めに引用したるものなり。故に生徒が既に習得せる教科書中に、適當なるものを指摘し得ば、これを省略し、若くは讀書科の時間に譲られん

ことを期す。然くせば、本書の全體を十時間内に教授すること、甚だ困難ならざるべしと信ず。

一、書中に用ゐたる文學上の名稱は、専ら在來慣用せるところに從はんとしたれども、律語といふ一語のみは、已むを得ずしてこれを用ゐたり。此語は、獨語のケアンデテ、レ、ドを翻譯したるものにして、散文に反對せる語なること、書中に説くが如し先輩中、既に此語を用ゐたるものも尠からず、分類上、又極めて明確なる語なれば、韻文、歌等の如き不穩當なる語を墨守せんよりは、大に便利なるべし。ことに從來の文學史家が、謡曲、淨瑠璃等の類を、散文中に加へて恠まざりしが如きは、韻文又は歌などといふ語の意義の漠然たりしに由るところ多きに似たり。これ著者が、敢て此一新語を採用せし所以なり。

明治三十一年初秋

著者識

# 日本文學史要

## 目次

序論	一頁
第一章 奈良朝以前	五
日本文學の起原	五
奈良朝以前の文學	九
第二章 奈良朝	一三
總説	一三
律語	一五
散文	二一
第三章 平安朝	二五

總説	二五
律語	二七
散文	三四
第四章 鎌倉時代	五一
總説	五一
律語	五二
散文	五七
第五章 室町時代	七一
總説	七一
律語	七二
散文	八〇
第六章 江戸時代	九三

附

總説	九三
律語	九五
文體變遷の畧表	
時代文學畧表	

# 日本文學史要

文學士 佐々政一 著

## 序論

日本文學史とは、日本文學の起原、發達、變遷を叙する歴史なり。而して、日本文學とは、日本人が、自國の言語を以て、自己の思想、感情、想像等を叙したる記載物をいふ。

抑、一國文學の特質は、其國民の特性に起因し、其特性の發達、國家の治亂、外國思想の感化等に由りて、發達變遷するものにして、我が天壤無窮の帝室を戴き、秀麗なる富嶽、琵琶湖の靈氣に養はれたる、忠勇にして優美なる日本國民が、上下三千年の治亂と、漢學思想、佛教思

想等の感化とに由りて、如何なる文學上の發達變遷を爲し、かは、頗る興味ある問題にして、又國民の知らざるべからざるところなり。

文學は、其言語配列の方法によりて、大別して二種となすことを得、律語及び散文これなり。

律語とは、言語配列の方法に、特別なる規律ある文學にして、日本文學に於ては、一句中の音數を一定にするを常とす。長歌、短歌、俗謠、發句等の類これなり。

散文とは、これに反して、言語配列の方法に、特別なる規律なき文學にして、我國の物語、小説、草紙、隨筆等の類皆これに屬す。

律語と散文とは、互に相影響して發達するが故に、まゝ兩者を混じたる文學あり。上古に在りては、散文と稱すべきものにして、記誦に

便ならんが爲めに、律語に近き形をなせる古事記の類あり、後世に至りては、律語中に散文を交へたる謠曲、淨瑠璃等あり。



## 第一章 奈良朝以前

### 日本文學の起原

文學は記載物なるが故に、其起原は、必ずや、文字の起原の後に在らざるべからずされば、漢文字の渡來以前に、既に我國固有の文字有りしや否やは、日本文學の起原を知らんとする者の、先づ知らざるべからざる所なり。

蓋我國は、神代より朝鮮との交通あり、衣食住より諸種の技術に至るまで頗る開化せりしこと、國史に見ゆれば、所謂神代文字等の形象文字様のものが、早く社會の一部に行はれしなるべけれど、未だ一般の社會に流布するに至らず、未だ見るに足るべき文學を作るに至らざるに先つて、更に進歩したる漢文字輸入せられて、在來の

文字は、全く湮滅するに至りしなるべし。されば、漢文字渡來以前には、未だ完全なる文學と稱すべきものあらざりき。たゞ、我國には夙に口授の法行はれて、家々の耆老は、時々子孫を集めて、大にしては一國、小にしては一家の舊事を口授し、又語部と稱する一部族ありて、専ら國家の舊事を口授相傳すること、を業としたりしかば、太古に於ける、諸般の歴史上の事跡より、歌謠の類に至るまで、相傳へて忘れざりき。後世漢文字を以て、其口碑を記載したるものを、古事記、風土記、氏文等とす。これ等の書は、多く漢文を混じれば、太古の語法を失ひし所尠ならず。日本書紀も古の傳説を記したるものなれども、専ら漢文を用ゐたれば、歌謠以外には、上古の語法を見ること能はず。左に二三の歌謠と、風土記の一節とを記して、日本文學の萌芽を示さん。

素盞之男尊、櫛名田姬を娶りて、須賀の宮を造り給ひし時、雲の立ち上るを見てよみ給へる歌。

八雲たつ出雲八重垣 妻ごめに八重垣造る、其八重垣を

道臣命、神武天皇東征の時、忍坂邑にてよめる歌。

忍坂の大室屋に、人さしはに來入り居り、人さしはに來入り居りとも、みつみつし

來目の子等が、頭搥い、石搥い持ち、撃ちてしやまん。

日本武尊、東征凱旋の途次、酒折の宮にて、侍臣に宣給へる歌。

にひばり、筑波を過ぎて、幾夜か寝つる。

侍臣答へ奉れる歌。(一)

かゝなへて、夜には九夜、日には十日を。

此時代の歌は、總て、五七數節の後に七の句を置きたるものにして、其五七二節なるを短歌と云ふ。素盞之男尊の歌これなり。此歌は又歌の史に見わたる始なり。其二節以上なるを長歌と云ふ。道臣命の歌これなり。而して又稀に其一節なるものあり。日本武尊及び其侍

忍坂、大室屋上郡

新從、新は内苑とて、由らな、歌、頭搥、石搥、作、旋

臣の歌これなり。この問答の體は、後に少しく變化して連歌となりぬ、故に世人、或はこれを以て連歌の始となす。

出雲風土記、國引の段の一節

國引きませる八東臣津野命詔り給はく、八雲立つ出雲の國は、狹布の稚國なるかも、初國チニサ小く作らせり、故作り縫はな、と詔り給ひて、栲カク衾キム新羅の崎ミヤキを、國の餘り、餘り有りやと見れば、國の餘り有り、と詔り給ひて、童女イメメの曾オヤすき取らして、大魚の腮ヒレつき別けてはたす、きほふり別けて、みつよりの綱うちかけて、しもくる葛くるやくるやに、河船カフネのもそろもそろに、國來クニキ國來クニキとひき來て縫へる國は、古津コヅの打ち絶えよりして、やほよねきづきの崎ミヤキなり。

此一節の如きは、上古の言語をさながら傳へたるものなるべし。記誦に便ならんが爲めに、頗る律語に似たる體を成せるは其特色なり。總て此時代の歌謠及び口碑は、純朴なる上古の風俗の反照として、自然にして毫も鏤刻を用ゐざる間に、眞率なる雅音あり。

奈良朝以前の文學

紀元九百年代應神天皇の御代に、朝鮮の使者阿直岐及び博士王仁來りて、皇子稚郎子に經書を教へ奉りき。これ漢文字の我國の朝廷に傳はりし始なり。この以前にも、私に漢文字を學びし者ありけれども、未だ一般に流布するに至らざりき。されば我國に完全なる文字あるは、此時に生まれりと云ふべく、純然たる文學も、亦此時に生まれりと云ふべし。其後阿直岐、王仁の子孫、其他許多の朝鮮人、支那人來化して、文藝及び工藝に従事せしかば、漢文字、漢學思想は、其風俗とともに、漸く傳播して、彼の文字の音訓を假りて、國語を記すること亦從つて始まりぬ。この間に、嘗て支那、朝鮮に傳はれりし印度の佛教も、亦我國に傳はりぬ。紀元千二百年代欽明天皇の時、蘇我馬子

之を祀るに至つて、佛教始めて盛なり。佛教思想是に於て又我國に入る。

此の漢學思想と佛教思想との傳播は、終に紀元千三百年代孝徳天皇の御代に於る大化の新制を導きぬ。然れども、此の時代は未だ模倣の時代にして、此等の思想は未だ日本固有の思想と調和するに至らず、其文學は依然たる上古の思想にして、唯自然なる發達の爲めに、少しく其巧緻を増進せるのみ。次に載せたるは、此の時代の歌謠と欽明天皇の頃に成れる祝詞となり。

天智天皇春山の萬花の艶と秋山の千葉の彩と、いづれかまされる、と問ひ給

ひしとき、額田王の答へ奉れる歌。萬葉集三卷

冬木もり春さり來れば、鳴かざりし鳥も來鳴きぬ、咲かざりし花も咲けれど、山をしみ入りても取らず、草深かみ、手折りても見ず、秋山の木の葉を見ては、黄葉をば取りてぞしぬぶ、青きをば置きてぞなげく、そこしうらめし、秋山われ

鏡王  
初天智天皇  
後天智天皇

是神國ニ程ニ春葉色ハ秋葉色モ年ニ初ツケリ

磐姫皇后、天皇を思ほしめしてよみ給へる歌。萬葉集三卷 一首在歌

ありつゝも君をばまたん。うちなびくわが黒髪に、霜の置くまで。

出雲國造神賀詞の一節 祝詞考

高天の神王、高御魂、神御魂の命の、皇御孫之命に、天の下大八島國を事依さしまつらし、時に、出雲の臣等が遠祖天の穗日の命を國體見遣し、時に、天の八重雲を押わけて、天翔り國翔りて、天の下を見廻りて、返事申したまはく、豊葦原の水穗の國は、晝は五月蠅なす水沸き、夜は火瓮の如くかこやく神あり、石根木立、青水沫も事問ひて荒振國なり。然れども鎮めむけて、皇孫之命に安國と平らけく知しめさしめむと申して、己の命の兒、天夷鳥命に布都怒志命を副へて、天降し遣して、荒ぶる神どもを撥ひ平らげ、國作らし、大神をも媚び鎮めて、大八島國現事顯事々さらしめき。乃ち大穴持命の申し給はく、皇御孫之命の静まりまさむ、大倭の國と申して、己の命の和魂を、八咫鏡に取つけて、倭の大物主櫛瓊玉命と御名を稱へて、大御和の神なびにませ、己の命の御子、阿遲須伎高孫根命の御魂を、葛木の鴨の神奈備にませ、事代主命の御魂を、宇奈提にませ、賀夜奈流美命の御魂を、飛鳥の神奈備にませ、皇御孫之命の

近き守神モリカミとたてまつり置きて、八百丹ヤチハチノ杵築宮キリキミに静りましき、こゝに親神ウラミカミ魯伎神ルキカミ魯美命ルミノミコトの宣りたまはく、汝天ニの穗日ホヒの命は、天皇命ニの手長テナガの大御世オホミヨを、堅磐ツルハシに常磐トコトシにいはいまつり、いかしの御世ミヨに幸へまつれど、仰せ給ひし次でのまにまに、いはひごと仕へまつりて、朝日の豊榮トヨシキ登ノボに、神のゐやじり、臣のゐやじりと、御禱ミヤガヒの神寶ミヤタマ獻ノゾクらくとまをす。

奈良朝以前詞話解類考考

一、校威言別 七卷 編守部 刊本

一、日本紀歌通解 二卷 荒木田久老アライノ 刊本

一、国風前編 中村幸次郎 増田平儀

一、日本文學史考 鈴木弘英

祝詞歌

一、祝詞考 三卷 加茂長則

一、出雲國賀神加後歌 二卷 本廣土長

一、大坂朝後歌 二卷 全

一、大坂朝後歌

一、祝詞考解 六卷

一、祝詞歌集系 二冊

久保幸次郎

水穂會

## 第二章 奈良朝

### 總説

文學史上の奈良朝は、政治史上の奈良朝と少しく異なりて、紀元千三百年代持統天皇の頃より、千四百年代桓武天皇の都を京都に遷し給ひし頃までの時代を云ふ。此時代は彼の模倣の文化が一たび其絶頂に達したる時代にして、支那との交通彌々頻繁に、遣唐使留學生益々多く、又前時代の末に起こりたる大學、國學は、盛んに漢學者を養成せしかば、漢文、漢詩大に流行し、元正天皇の御代には、日本書紀と稱する漢文の國史成り、孝謙天皇の御代には、懷風藻と稱する漢詩集成るに至りぬ。かく漢文學の流行するにつれて、漢字を以て國語を記すること益々自在となり、古事記、風土記、氏文祝詞、宣命

の類も記載せられ、萬葉集も成りぬ。

古事記、風土記、氏文の文は、純粹なる漢文と、漢字を以て國語を記したるものとの混合文にして、行幸於伊勢、轉入東國といふが如き漢文と、万介太麻波、天平佐女太麻波、傘といふが如き國文とを混じたり。

然るに祝詞、宣命は所謂宣命書、萬葉集は所謂萬葉書にして、ともに漢字の音訓を假りて國語を記したる、純粹なる國文なり、即ち

天神乃壽詞、遠稱辭、定奉良久、申須宣命書

山越乃風乎時、自見寐夜不落、家在妹乎懸、而小竹櫃萬葉書

宣命書は、天爾乎波の類を細字に記したるものにして、蓋し一段進歩したるものなり。

此等の記載法更に進歩して、片假名起こりぬ。片假名は、漢字の點畫

を省略したるものにして、當初は唯屢用ゐる文字の點畫を省略せるのみなりしを、省略の法漸次發達して、此時代の終りに至りては、五十音を完成するに至りぬ。而して、所謂五十音圖を完成したるは吉備眞備なり。

佛教亦此時代に至つて彌盛なりしかば、文學上にも無常寂滅の思想、稍あらはれたり。されど、其思想が、日本思想と眞に調和したるは次の時代なり。

### 律語

奈良朝の律語の粹は、萬葉集に盡きたり。此集の撰者及び集撰の時代は、詳かならねど、或は曰く、此時代の末葉の歌人大伴家持の撰なりと。集中、紀元九百年代、仁徳天皇の御代以來の古歌をも載せられたり。其大部分は、此時代の歌にして、上は天皇の御製より、下は役民の

歌、東北地方の賤民の歌、乞食者の詠をさへ集められたれば、以て社會全般の好尚を窺ふべく、又以て社會一般に、歌を嗜みしことを知るべし。かく諸種の方面の歌謠を収めたれば、まゝ拙劣なるものなきに非ずと雖も、其高妙なるものは、雄渾壯大の致、平安朝以後の歌謠に、絶て其匹儔を見ざるもの多し。

集中の歌數は、短歌四千百七十三首、長歌二百六十二首、旋頭歌六十一首にして、別に連歌一首あり。短歌長歌は既に説明しぬ。旋頭歌とは、短歌第二句と第三句との間に、七音の句一句を加へたるもの。連歌とは、短歌の初三句と終二句とを分かち、二人にて詠じたるものにして、此の集に見えたる一首の連歌は、純然たる連歌の始なり。柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴旅人、大伴家持等、當代の歌人の有名なる者は、皆長歌に巧なりき。これ等の歌人の中にも、人麿、赤人の

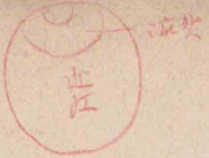
唐歌(下巻)  
唐歌(下巻)  
唐歌(下巻)

二人は最も秀で、歌聖の稱あり。人麿は持統、文武の兩朝に仕へ、赤人は聖武の朝に仕へし人にして、ともに其官職詳らかならずと雖も、高位高官に至りし人には非ず。憶良は頗る漢文に通ず、一たび遣唐使となり、後、聖武の朝に筑前守に任ぜらる。旅人は有名なる武門の名族に出で、聖武の朝に、大納言に至りき。家持は其子なり、中納言征東將軍に任ぜらる。萬葉集の選者と稱せらるゝは實に此人なり、父子の詠ともに慷慨の氣に富めり。

近江の荒都を過ぎし時、柿本人麿のよめる歌。

萬葉集二卷

たまだすきぬ傍の山の、 檜原の聖の御世ゆ、 生れましと神のことく、 つがの木のいや繼ぎくくに、 天の下しろしめしを、 空に見つ大和を置きて、 青によし奈良山を越に、 いかさまに思ほしめせか、 天さかる鄙にはあれど、 いはらしの近江の國の、 さゝ浪の大津の宮に、 天の下しろしめしけん、 天皇の神の命の大宮はこゝと聞けども、 大殿はこゝと云へども、 春草の茂く生ひたる、 霞立



つ春日のきれる、百しきの大宮どころ、見ればかなしも。

反歌

さゝ浪の汐賀の唐崎、さきくあれど、大宮人の船まぢかねつ。  
さゝ浪の滋賀の大わだ、よどむども、昔の人にまたも逢はめやも。

不盡山を望みて、山部赤人のよめる歌

天地の別れし時ゆ、神さびて高く貴き、駿河なる富士の高根を、天の原ふりさ  
け見れば、わたる日のかげもかくろひ、照る月の光も見えず、白雲もい行きは  
いかり、時じく雪はふりける。語りつき、いひつき行かん、富士の高根は。

反歌

田子の浦ゆ、うち出で、見れば、ま白にぞ、富士の高根に、雪はふりける。

感情を反せしむる歌

山上憶良

或は人あり、父母を敬するを知らず、侍養を忘れ、妻子を顧みずして、脱履より  
輕し、自畏俗先生と稱す。意氣青雲の上に揚ると雖も、身體猶塵俗の中にあり、  
未だ修業得道の聖に驗あらず。蓋は、山澤亡命の民なり。所以に三綱を指示し、  
更に五教を開き、之に遺くるに歌を以てして、其感を反せしむ。歌に曰く。

父母を見れば尊し、  
ちとりのかゝらはしもよ、  
ぎて往くちふ人は、  
まに、  
たにぐゝのさわたる際み、  
に、  
しかにはあらむか。

反歌

久方のあまちは遠し、なほくゝに、いへにかへりて、なりをしまさに。

喩族歌

大伴家持

久方の天の戸開き、高千穂の嶽にありし、すめらぎの、神の御世より、  
手握り持たし、眞魔矢を手挟みそへて、大久米の益荒丈夫を、前に立て、  
り負はせ、山河を岩根さくみて、踏みどほり、國まぎしつゝ、  
け、まつろはぬ人をもやはし、はき清め、仕へまつりて、  
原の畝火の宮に、宮柱ふとしり立て、天の下しろしめしける、  
嗣を、つぎてくる君の御代々々、かくさはぬ赤き心を、すめらへにきはめつく



して、仕へくる祖（孫）のつかさと、ことたて、授け給へる、生（子）の子のいや（孫）繼ぎに、見る人の語りつぎて、聞く人の鏡にせんを、あたらしき清きその名ぞ、ねほろかに心思ひて、むなごとも祖の名たつな、大伴の氏と名におへる、ますらをのとも。

反歌

敷島の大倭の國に、明らけく名にねふとも、をこころつとめよ。  
劍太刀いよ、磨ぐべし、いにしへゆさやけくねひて、來にしその名ぞ。

梅花の歌

わが園に梅の花ちる、久方の天より雪の、流れくるかも。

大伴旅人

香椎浦にてよめる歌

いざこども香椎の瀉に、白妙の袖さへぬれて、朝菜つみてん。

同

伊香山にてよめる歌

草枕旅行く人も、行きふればにほひぬべくも、咲ける萩かも。

笠金村

いかに山野邊に咲きたる、萩見れば、君が家なる尾花しあもほゆ。

旋頭歌

君がため手力つかれ、織りたる衣を、春さらば、いかなる色に、すりてばよけん。  
連歌（ばあまをさしうらん）  
佐保川に水をせきあげて、植ゑし田を、  
蒔る早飯はひとりなむべし。  
尼家持

散文

此時代の散文の重なるものは、祝詞と宣命となり。祝詞は、神明に奏する詞にして、宣命は君命を下に傳ふる文章なり。ともに上古の語を以て文をなし、多く對句、冠辭等を用ゐて、謹嚴渾厚の間極めて流麗典雅の趣を存す。中にも、前時代に成れる出雲國造神賀の詞、此時代の大祓の詞等は、祝詞中の有名なるものなり。宣命は、續日本記中に見えたるもの皆誦すべし。  
古事記は、元正天皇の朝に、太安麿が、稗田阿禮の口授を筆記したる

高僧文  
天作、正字、其令  
小全しりしモノ

ものにして、我國最古の歴史として、又、遒勁蒼渾なる文學として、國文界の至寶なり。風土記は、諸國の風土舊事を記したるもの、氏文は家々の祖先の事跡を記したるものにして、又、ともに此時代に至つて記載せられたり。これ等の書の大部分は、皆前時代より口授し來りしものにして、多く前時代の古語を混ざるのみならず、漢字を以て記載するに當つて、多少、語脉をも失ひたる所あれば、直ちに當代の文を代表せしめ難きが如し。

光仁天皇寶龜二年二月の詔 （續日本記）

（續日本記）

藤原左大臣に詔り給ふ大命を宣る。大命にませ詔り給はく、大臣明日は參出來仕へむと待ひ給ふ間に、休まりて參出ます事はなくして、天皇が朝廷を置きて罷りいまずと聞し食しておもほさく、ねよづれかも、たはごとをかも云ふ、信にしあらば、仕へまつりし太政官の政をば、誰に依ざしかも罷りいます、孰に授けかも罷りいます。恨めしかも、悲しかも、朕が大臣、誰にかも我が語ひさけむ、孰にかも我問ひさけむ、

と悔しみ、惜らしみ、痛み、悲しみ、大御泣哭かします、と詔り給ふ大命を宣る。

悔しかも、惜らしかも、今日よりは、大臣のまをし、政は、聞しめさずやならむ、明日よきは、大臣の仕へまつりし儀は、見そなはさずやならむ。日月累り行くまに、悲しき事のみし、彌起るべきかも、歳時積り行くまに、さぶしき事のみし、いよ、まさるべきかも、朕が大臣、春秋の麗しき色をば、誰と共にかも、見そなはし弄びたまはむ、山川の清きところをば、孰と共にかも、見そなはしあからへ賜はむ、と歎き給ひ、憂ひ給ひ、大ましますと詔り給ふ大命を宣る。汝大臣の萬の政ふさねもちて、怠り緩む事なく、まげ傾くる事なく、王等、臣等をも、彼是、別く心なく、普く平らけく奏さひ、公民の上をも、廣く厚く慈みて、奏ひし事、これのみにあらず、天皇が朝廷を、暫くの間も、罷り出で、休もふ事なく、食國の政の善くあるべき狀、天の下の公民の休まるべき事を、且夕夜日と云はず、思ひ議り奏ひ、仕へまつれば、いそしみ、明らかみ、おだひし、たのもしみ、思ほしつゝ、大まします間に、忽ちに朕が朝廷を、さかりて罷りましぬれば、言はむ術もなく、爲むすべも、しらに、悔し給ひ、わび給ひ、大ましますと詔りたまふ大命を宣る。

又事別て詔りたまはく、仕へまつりしこと、廣み、厚み、汝大臣の家内の子どもをも、は

ふり給はず、失ひ給はず、慈みたまはむ、起したまはむ、たづねたまはむ、かへり見たまはん、汝大臣の罷道も、うしろかろく、心もおだひに思ひて、平らけく、幸く、罷りとほらすべし、と詔りたまふ大命を宣る。

天孫降臨 (古事記)

古事記上巻

故、こゝに天津日子番能邇々藝命、天の石位を離れ、天の八重雲を押し分けて、稜威の道別に道別きて、天の浮橋にうきまじり、ろり立たして、筑紫の日向の高千穂の櫛觸嶽に天降りましき。故、こゝに天忍日命、天津久米命二人、天の石鞞を取り負ひ、頭椎の太刀を取り佩き、天の波士弓を取り持ち、天の眞鹿矢を手挟み、御前に立たしして仕へ奉りき。故、其天忍日命、天津久米命、向の韓國を笠沙の崎に求ぎ通りて、朝日の直さす國、夕日の日照る國なり、故此地を吉地と詔り給ひて、底津岩根に宮柱太きり立て、高天原に氷椽高きりて坐しき。

日本書紀

### 第三章 平安朝

#### 總説

紀元千四百年代、桓武天皇平安遷都の時より、千八百年代、鎌倉覇府創立の時まで、即ち藤原時代、平家時代を通じて平安朝と云ふ。漢學、佛教の流行は、奈良朝の後を承けて、なほ駸々として進みしかば、此等の思想が我が固有の思想と調和するとともに、古來の尙武の風は漸く消磨して、浮華驕奢の風大に起こり、文學も亦従つて艶麗纖巧の美に長じ、雄壯なる奈良朝の風姿、殆んど見るべからず、且つ文字の事、總べて貴族社會の專有に歸して、下民に及ばざりしは、前時代に異なることなし。

奈良朝の末に、片假名の發明あり、此時代の始には、平假名の發明あり、

り。平假名は、漢字の草體より起こりしものにして、僧空海が「いろは歌」を作るに至りて完成しぬ。かく二種の完全なる假名文字成りて、國語を記すること、大に便利なるに至りしかど、學者は尙漢學に心酔して、漢詩、漢文のみに專なること久しかりき。然るに紀元千五百年代醍醐天皇の頃より、遣唐使廢せられて、漢學、稍衰色あるに乘じ、紀貫之以下の國文學者輩出せしかば、和歌には勅選集起こり、國文には物語、草紙、日記、紀行の類盛に行はれき。されど漢文も亦全く衰ふるに至らず。要するに此時代は、國文、漢文ともに盛なりし世なり。されば漢文の著書には、歴史に、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄の五書あり。これに日本紀を加へて六國史と云ふ。歴史家の至寶なり。詩文集に經國集、本朝文粹等あり。詩歌を合輯したるものに和漢朗詠集あり。ともに當代以後の文學者の愛讀せるも

日本書紀  
日本紀

經國集、漢所反編、釋名、數從元、三五卷  
本朝文粹、藤原、明衡、詩、文

凌雲集、詩集、小野、岑、守、和、集、續、集、元、三五卷  
文章秀麗集、詩集、仲、雅、三、新、集、類、集、元、四、四、卷

歌、集、見、エ、テ  
樂、ム、コ、ト、シ、レ、

歌、集、見、エ、テ  
樂、ム、コ、ト、シ、レ、

のにして、後世の國文學に影響せること尠なからず。

### 律語

我が上古の歌は、盡く謠ふものなりしを、奈良朝の末より、記載の法自由となりて、謠はざる歌を生じ、此時代に至りては、歌は謠はざるものとなりたりて、これとともに、長歌は殆んど滅しぬ。而して長短歌に代りて、謠はれしものを催馬樂、今樣等とす。

一、歌。此時代の歌は殆んど短歌のみなること既に云ふが如し。そは一般人情の趨勢に従ひて、優美に偏長せしのみならず、題詠漸く行はれて、専ら巧を言語の末に争はんとする傾向をさへ生じた。故に雄渾、壯大なるものに乏しと雖も、其措辭の巧妙なる、其聲調の優美なることは、遠く奈良朝の右に在り。

奈良朝の末より、詩賦の流行に壓せられて、歌は久しく振はざりし

が醍醐天皇の時紀貫之等勅を奉じて萬葉以後の歌を集めて古今集を撰すこれ勅撰集の始なり。これより和歌大に勃興して次で村上天皇の時源順等後撰集を撰び花山天皇拾遺集を撰び給ふ以上を三代集と云ふ。就中古今集最も優れたり。其後又後拾遺金葉詞華千載の四勅撰あり。

此時代の歌人の有名なるものを在原業平小野小町紀貫之凡河内躬恒源順藤原公任源俊賴藤原基俊藤原俊成等とす。業平貫之俊成最も傳ふべし。業平は桓武天皇の孫なり時宛も藤氏專横の世にして落魄志を得ず去つて風月の間に自放す歌は其最も長ずるところにして又伊勢物語の著あり貫之は歌人望行の子にして碩學長谷雄の孫なり。土佐守を経て木工頭御書所預に任ぜられ古今集の撰者たり。土佐

日記古今集の序等の名文あれども歌人として最も著名なり後人以て赤人入麿に次ぐものとなす。俊成は御堂關白道長四世の孫にして皇太后大夫に任ぜられ千載集を撰す。後鳥羽天皇就て歌を學び給ひしかば終に和歌所の所領を其家に賜ひ子孫相襲ぎて歌を以て朝廷に仕ふ後世の所謂師範家の祖なり。

交仰部

渚の院にて櫻を見てよめる。竹書秋王

在原業平 一の若木歌上

世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。

妻の妹をもて侍りける人に、うへの衣を伊勢物語に工段

贈るとて、

全

十巻巻

紫の色濃きときは、めもはるに、野なる草木がわかれざりける。

長谷に謁づる毎に宿りける人の家に、久しく宿らで、程へて後至りければ、かの家の主かくさだかになん宿はある、といひ出して侍りければ、そこに立て

りける梅の花を折りてよめる。

紀

貫之

人はいさ、心も知らず、故郷は、花ぞ昔の香に匂ひける。

一の若木歌上

陸奥へ罷りける人に、よみて遣しける。 全

ハツ巻終刊

白雲の八重にかさなるをちにても、思はん人に心へだつな。ヤれき。

世の中のはかなきことを思ひける折に、

菊花を見てよめる。

全

九の巻、秋の下

秋の菊匂ふかざりはかざしてん、花よりさきと知らぬわが身を。

雪のふりけるを。

全

霞たち、木の芽もはるの雪ふれば、花なき里に花ぞちりける。

一の巻

櫻のちるをよめる。

凡河内躬恒

雪とのみちるだにあるを、櫻花、いかに散れどか風の吹くらん。

二の巻

時鳥の鳴けるを聞きてよめる。

全

時鳥、我どはなしに、卵の花の、うきよの中に鳴き渡るらん。

三の巻

雷の坪に、人々集まりて、秋の夜を惜しむ

歌よみける序によめる。

全

かくばかりをしと思ふ夜を徒らに、寝て明かすらん人さへぞうき。

壬生忠岑

題しらず。

壬生忠岑

雷、時鳥、第廿卷

久方の月の桂も、秋はなほ、もみぢすればやてりまさるらん。

題しらず

小野小町

思ひつゝぬればや、人の見はつらん、夢と知りせばさめざらましを。

題しらず

よみ人知らず

白雲にはね打かはし飛ぶ雁の、數さへ見ゆる秋のよの月。

屏風に

源 順 振造 木下

わが宿のかきねや春を隔つらん、夏來にけりど見ゆる卯の花。

睦月ばかりに、津の國にありける頃、人の

もとにいひ遣しける。

能因法師

心あらん人に見せばや、津の國の、難波あたりの春のけしきを。

有國太貳になりて下りける時、よみ侍り

ける。

藤原公任

別よりまさりて借しき命かな、君にふたゝびあはんと思へば。

大覺寺に、人々あまた集まりて、ふるき瀧

をよめる

全

瀧の音はたえて久しくなりぬれど、名こそ流れてなほきこえけれ。（凡） 十

題しらす（凡） 式部（凡） 式部（凡） 式部（凡）

ねほかたの秋のあはれを思ひやれ、月に心はあくがれぬども。（凡）

題しらす（凡） 和泉式部（凡） 式部（凡） 式部（凡）

外山吹く嵐の風の音きけば、まだきに冬の奥ぞしらるゝ。（凡）

薄（凡） 源俊賴（凡） 全（凡） 全（凡）

鶉鳴くまのゝ入江の濱風に、尾花なみよる秋の夕暮。（凡）

題しらす（凡） 藤原基俊（凡） 全（凡） 全（凡）

暮はてぬ歸さは送れ山櫻、たがために来てまどふかとしる。（凡）

題しらす（凡） 藤原俊成（凡） 全（凡） 全（凡）

霜さやて枯れ行く小野の岡邊なる、檜の廣葉に時雨ふるなり。（凡）

題しらす（凡） 藤原俊成（凡） 全（凡） 全（凡）

夕ざれば野邊の秋風身にしみて、鶉なくなり、深草の里。（凡）

題しらす（凡） 全（凡） 全（凡） 全（凡）

駒どめてなほ水かはん山吹の、花の露そふ井手のたま川。（凡）

日本大正川、  
一山城 幸井川  
二馬場 三馬場 四馬場  
三並江 四並江 五並江  
四武蔵 五武蔵 六武蔵  
五陸奥 六陸奥 七陸奥  
六河内 七河内 八河内  
七河内 八河内 九河内  
八河内 九河内 十河内

二、催馬樂、今様。ともに此時代の謠ひものなり。古は童謠の類まで、盡く五七調なりしを、奈良朝の末に至つて、初めて七五を以て始まれる童謠起りぬ、催馬樂中の葛城の曲これなり。催馬樂は多くこれより以後の謠ひものなれば、従て七五調のもの多し。今様は七五、四句よりなれる謠ひものにして、此時代の末期に流行したり。

酒飲（催馬樂）

酒をたうべてたべ酔うて、たんどこりんぞや。まうで来る。なよろぼひそ。まうでくる。

淺緑（全）

淺緑や、濃い花田、染めかけたりと、見るまでに、玉光る、下光る、新京朱雀の、しだり柳、まだい田居となる。前栽、秋萩、撫子、花唐菜、しだり柳。

蓬萊山（今様）

蓬萊山には千歳ふる、萬歳千秋重なれり、松の枝には鶴巢くひ、巖が峽には龜遊ぶ。

古き都 (今様) ふるみやこ

古き都を来て見れば、淺茅が原とぞなりける。月の光は隈なくて、秋風のみぞ身にはしむ。

此他に、なほ、朗詠と稱して、詩を和譯して謠ふこと、盛に行はれたり、純然たる日本文學にはならねど、後世の謠ひもの、語りもの等に、影響すること多ければ、特に此に其一例を示さん。

松根に寄りて以て腰を擧づれば千年の翠手に滿つ、梅花を折り而頭に挿めば、二月の雪、衣に落つ。

橋在列、子日、りる文、題三、作

倚松根而擧腰、千年、翠、手、滿、折、梅、花、而、挿、頭、二、月、之、雪、衣、

散文

勅撰集の例起こりてより、短歌は一般上流社會に流行せしかど、散文に至つては、なほ、漢文を尊び、國文を以て、婦女子の業となす陋習を脱すること能はざること久しかりき。されば、此時代の最大文學なる源氏物語枕草紙はともに婦人の手に成り、偶、男子の手に成り

し土佐日記の如きも、亦自ら婦人に擬して作りぬ。故に此時代の散文は、女らしく優美なること短歌に過ぎたり。物語、草紙、日記、紀行等は、其、主要なるものなり。

一、物語。物語は、上古の語部の語りたる物語に擬して起りたるものなれども、此時代の物語は、既に律語の臭味を帯ぶることなく、純然たる散文なり。物語に二種あり、作り物語、歴史物語これなり。作り物語とは、即ち小説にして、伊勢物語、竹取物語、源氏物語を其主要なるものとす。其他大和物語、宇津保物語、住吉物語、落窪物語、狹衣等あり。

伊勢物語は在原業平の著と稱せらるれども、異説多し。短歌の小序を敷衍したるが如き、極めて短かき物語、數十篇より成れり。每篇、主として男女間の情事を描きたるものなれども、其文章は簡潔、遒健、





長ら、紙神、

二、草紙。草紙とは隨筆と云ふに同じ。枕草紙獨り有名なり。そは清少納言が其見聞せる事物を記載し、批評せるものにして、其燃犀の才、銳利の筆、能く事物の真相を暴露し、最も縦横の氣に富み、溫藉なる源氏の文と頗る其趣を異にせり、後人源氏とともに平安朝文學の雙璧とす。

清少納言は有名なる歌人清原元輔の女にして、一條天皇の皇后に仕へ、文才あるを以て頗る寵遇せられしが、後零落して終るところを詳らかにせず。

三、日記。紫式部日記、土佐日記最も有名なり。其他蜻蛉日記、和泉式部日記、讚岐典侍日記等あり。日記に記すは、二條院紫式部日記は、式部が上東門院に奉仕せりし間の日記にして、其文章は源氏物語の如く華美ならず、簡淨溫雅の調、能く作者の爲人を

此式部日記、日記  
中故を記せし  
源氏物語

想見せしむ。土佐日記は貫之が土佐の國より歸京する時の紀行にして、まゝ滑稽の文を交へたる輕妙なる文章なり。

伊勢物語、伊勢物語  
権別、伊勢物語  
兼平、女、阿倍孫

母の文 (伊勢物語)

昔男ありけり、身はいやしなから、母なん内親王なりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばしば得まうでず。ひとり子にさへありければ、いと悲しうし給ひけり。さるほどに、十二月ばかりに、頓の事とて、御文あり驚きて見れば、別事はなくて、外事なり。

老ぬればさらぬ別別、別、別のありといへば、いよく見まくほしき君かな。となんありける。これを見て、馬にも乗りあへず參るとて、いといたう打ち泣きて、道すがら思ひける。

子安貝 (竹取物語) 石上竹取

日暮ぬれば、かの寮におはして見給ふに、まことに燕巢作れり、くらつ鷹申すやうに尾をさへげて廻るに、荒籠に人を載せて釣り上げさせて、燕の巢に手をさし入れさせ、探るに、物もなしと申すに、中納言悪しく探ればなきなりと腹立ちて、誰ばかり

鳥子安貝、子安貝  
鳥子安貝、子安貝  
鳥子安貝、子安貝

大炊家、腰、八、  
舟、置、

脂燭、布、油、  
ヲ、置、

おぼへんにとて、我のぼりて探らんと給ひて、籠にのりて釣られのぼりて、窺ひ給へるに、燕尾を捧げていたく廻るに合せて、手を捧げて探り給ふに、手にひらめる物さばる時に、われ物握りたり、今はおろしてよ、翁爲得たり、どの給ひて集りて疾くねろさんとて、綱を引き過ぐして、綱絶ゆる、即やしまの鼎のうへにのけざまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目は白眼にて臥し給へり。人々御口に水をすくひ入れ奉る、からうじて御心地いかおぼさると問へば、息の下にて、物は少し覺ゆれど、腰なん動かれぬ。されど子安貝をふと握り持たれば、嬉しく覺ゆるなり。まづ脂燭さしてこ、この貝顔見んと、御心しもたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまり置ける古糞を握り給へるなりけり。それを見給ひて、あなかひなのわざやとの給ひけるよりぞ、思ふに違ふことをば、かひなしとはいひける。かひにもあらずと見給ひけるに、御心も違ひて、唐櫃の蓋に入れられ給ふべくもあらず、御腰は折れにけり。中納言はいはけたるわざして病むことを、人に聞かせむとし給ひけれど、それを病にて、いと弱くなり給ひにけり。貝をぬ取らずなりけるよりも、人のきゝ笑はんことを、日にそへて思ひ給ひければ、たいに病み死ぬるよりも、人聞き耻しく覺は給ふなりけり。

我家のあれたるさま (土佐日記) 終節

家にいたりて、門に在るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふがひなくぞこぼれやぶれたる家をおつたりつる人の心もあれたるなりけり。なか垣ころあれ、一つ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなり。さればたよりごとく物もたはずえさせたり。こよひかゝる事と、こわだかにものもいはせず、いとほしく見ゆれど、心ざしはせんとす。さて池めいてくほまり、水づける所あり、ほとりに松もありき。五年六年のうち、千年やすぎにけん、かた枝はなくなり、けり、今生ひたるぞまじれる。ねほかたみなあれにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひいでぬ事なく思ひ戀しきがうちに、この家に生まれし女子の、もろともにかへらねば、いかは悲しき。舟人も皆子いだきてのゝしる。かゝるうちに、猶かなしみにたへずして、ひそかに心しれる人といへりける歌。

く

うまれしもかへらぬものを、わがやどに、小松のあるを見るがかなしき。

とぞいへる。なほあかずやあらん、またなん、

見し人を、松の千年にみましかば、とほくかなしきわかれせましや。

忘れがたく口惜しきこと多かれど、は盡さず。

女は萬事を謹むべきこと（源氏物語）

すべて男も女も、わろものは僅かに知れるかたの事を、残なく見せ盡さんと思へる  
 こそいとほしけれ（源氏物語）。三史五經の道々しき方を、明かに悟りあかさんこそ愛敬なから  
 め。などかは女といはんからに世にあるもの公、私につけて、むげに知らずらいたず  
 しもあらん。わざとならひ學ばねども、すこしもかどあらん人の耳にも眼にもどま  
 る事自然に多かるべし。さるまゝには眞字をはしりがきて、さるまじきどちの女文  
 に、半すぎて書きすくめたる、あなうたて、此方のたをやかならましかばとみゆかし  
 心地にはさしも思はざらめ、れのづからこけしき聲に讀みなされなどしつ  
 と、ことさらびたり。これは上臈の中にも多かる事ぞかし。歌よむと思へる人の、やが  
 て歌にまつはれ、をかしきふるごとをも、初より取りこみつゝ、すさまじきをり  
 よみかけたるこそ物しき事なれかへしせねばなさけなし、せざらん人ははした  
 なからん。さるべき節會など、五月の節に急ぎまゐるあした、何のあやめも思ひしづ  
 められぬに、はならぬねをひきかけ九日の宴にまづかたき詩の心を思ひめぐらし、  
 暇なきをりに、菊の露をかこちよせなどやうのつきなきいとなみにあはせ、さらで  
 も、たのづからげに、後に思へば、をかしくもあはれにもあべかりけること、そのを

馬鹿も、源氏物語  
 女は萬事を謹むべきこと  
 三史五經の道々しき方を  
 明かに悟りあかさんこそ  
 愛敬なからめなどかは  
 女といはんからに世にあるもの  
 公、私につけて、むげに知らず  
 らいたずしもあらん。わざと  
 ならひ學ばねども、すこしも  
 かどあらん人の耳にも眼にも  
 どまる事自然に多かるべし。  
 さるまゝには眞字をはしりが  
 きて、さるまじきどちの女文  
 に、半すぎて書きすくめたる、  
 あなうたて、此方のたをやか  
 ならましかばとみゆかし心地  
 にはさしも思はざらめ、れの  
 づからこけしき聲に讀みな  
 されなどしつと、ことさら  
 びたり。これは上臈の中にも  
 多かる事ぞかし。歌よむと思  
 へる人の、やがて歌にまつは  
 れ、をかしきふるごとをも、  
 初より取りこみつゝ、すさま  
 じきをりよみかけたるこそ物  
 しき事なれかへしせねばな  
 さけなし、せざらん人ははし  
 たなからん。さるべき節會  
 など、五月の節に急ぎまゐる  
 あした、何のあやめも思ひし  
 づめられぬに、はならぬねを  
 ひきかけ九日の宴にまづかた  
 き詩の心を思ひめぐらし、暇  
 なきをりに、菊の露をかこち  
 よせなどやうのつきなきいと  
 なみにあはせ、さらでも、た  
 のづからげに、後に思へば、  
 をかしくもあはれにもあべ  
 かりけること、そのを

りにつきなく、目にもどまらぬなどを、たしはからずよみ出でたる、なかく心おく  
 れて見ゆ。萬の事になどかはさてもとねぼゆるをりから、時々、思ひわかぬばかりの  
 心にては、よしばみ情だゝざらんなんめやすかるべき。すべて心にしれらん事を、  
 知らず顔にもてなし、いはまほしからんことを、一つ二つのふしはすぐすべくな  
 んあべかりける。

秋の前栽（野分の一節） 源氏物語

ひんがしの對の南のそばに立ちて、御前の方を見やり給へば、み格子ふたまばかり  
 開けて、ほのかなる朝ぼらけのほどに、みすまきあけて、人々ゐたり、かうらんにもた  
 しかかりて、若やかなるかぎりあまた見ゆ、うちとけたるはいかゝあらん、さやかな  
 らぬあけぐれのほど、いろくなる姿は、いづれとなくをかし、童べおろさせ給ひて、  
 虫の籠どもに、露かはせ給ふなりけり。紫苑、撫子花の濃きうすき、袖どもに、女郎花の  
 汗衫などやうの、時にあひたるさまにて、四五人はかりつれて、こゝかしこの草むら  
 によりて、いろく籠どもをもてさまよひ、撫子花などのいとあはれげなる枝ど  
 も取りもてまゐる。霧のまよひはいと艶にぞ見ゆける。吹きくる追風はしゅうのか  
 に、ことに匂ふ香のかをりも、ふれはへ給へるねほんけはひにやど、いと思ひやりめ

でたく、心けさうせられて、立出てにくけれど、忍びやかにうちねどなびて、歩み出でたまへるに、人々げざやかに驚き顔にはあらねど、皆すべり入りぬ。

御衣をそむきさまにぬひたること (枕草紙) ぬきしり

後醍醐天皇  
正徳皇太子

南の院におはします比西の對に殿のおはします方に、宮もおはしますれば、寝殿におつまりゐて、さうくしければ、ふれあそびをし、わたどのにあつまりゐるなどしてあるに、これ只今とみのものなり、誰もたれもあつまりて、時かはさず縫ひてまるらせよとて、ひらぬきの御ぞを給はせられたれば、南おもてにあつまりゐて、御ぞかたみづ、誰かどく縫ひ出るといどみつゝ、近くもむかはず縫ふさまもいと物ぐるはし。命婦のめのとどくぬひはてしうち置きつるゆだけのかたの御身をぬひつるが、そむきさまなるを見つづけず、どちめもしあへず、まどひ置きて立ちぬるに、御せあはせんとすれば、はやうたがひにけり。笑ひのしりて、これ縫ひなほせといふを、たれがあしう縫ひたりと知りて、かなほさん、綾などならばこそ、裏を見ざらん縫ひたがへの人、げになほさめ、無紋の御ぞなり、なにをしろしにて、かなほす人たれかあらん、たゞまだぬひ給はざらん人になほさせよとて、きゝもいれぬば、さいひてあらんやとて、源少納言、新中納言などいひなほし給ひし顔、見やりてゐたりしこそを、かしかりし

か。これはよさりのぼらせ給はんとて、どくぬひたらん人をおもふとおほせられし。

風 (枕草紙)

嵐、木枯らし、三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹きたる花風いとあはれなり。八九月ばかりに、雨にまじりて、吹きたる風いとあはれなり。雨のあしよこさまにさわがしう吹きたるに、夏とほしたるわたぎぬの汗の香などかわき、すゝしのひとへに、ひきかさぬてきたるもをかし。此すゝしだにいとあつかはしう、すてまほしかりしかば、いつのまにかう成ぬらんと思ふもをかし。曉格子、妻戸などねしあげたるに、嵐のさど吹わたりて、顔にしみたるころいみじうをかしけれ。九月つごもり、十月一日の程の空うちこもりたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どものほろくどこぼれ落つるいとあはれなり。櫻の葉、棕のはなどこそ落つれ、十月ばかりに木立おほかる所の庭はいどめでたし。

野分の又の日こそ、いみしう哀におぼゆれ。たてじとみすいがいななどの伏しなみたるに、前裁ども心ぐるしげなり。おほきなる木どもたふれ、枝など吹き折られたるだにをしきに、萩、女郎花などのうへによるほひはひふせるいと思はずなり。格子のつぼなど、さどきはをことさらにしたらんやうに、こまくと吹入たるこそ、あらか

りつる風のしわざともねばねいと濃ききぬのうはぐもりたるに、朽葉の織物うす物などのこうちぎ着て、まことしく清げなる人の、夜は風のさわぎに寝覺つれば、久しうねれきたるまゝに鏡うち見て、母屋よりすこしるざり出たる、髪は風に吹まよはされて、すこしうちふくだみたるが、肩にかゝりたるほど、まことにめでたし。物あはれなるけしき見るほどに、十七八ばかりにやあらん、ちひさくはあらねど、わざと大人などは見ぬが、すいしの單のいみじう綻びたる花もかへりぬれなどしたる、薄色のどのお物をきて、髪は尾花のやうなるそぎすゑもたけばかりは衣の裾にはづれて、袴のみ鮮やかにて、そばより見ゆる。わらはべの、わかき人の根ごめに吹折られたる、前裁などをとりあつめ起こしたてなどするをうらやましげにおしはかりて、つきそひたるうしろをかかし。

浦々の別の一節 (榮花物語)

帥殿は筑紫の方なれば、未申の方におはします。中納言殿は出雲の方なれば、丹波のかたの道よりとて、戌亥さまにおはする。御車どもひき出るまゝに宮は御缺して、御手づから尼にならせ給ひぬ。内には此人々まかりぬ、宮は尼にならせ給ひぬ、と奏すれば、あはれ宮は唯にも御座まさいらむに、ものをかく思はせ奉る事と思し續けて、

大寺無師伊園  
道隆  
伊園  
一住  
住  
隆  
隆  
隆

極處  
有馬乾晴  
車  
運

涙こぼれさせ給へば、忍びさせ給ふ。昔の長恨歌の物語なども、かやうなる事にやど、悲しう思ひさるゝ事限りなし。此殿原のおはするを、世の人々の見るさま、少々物見にはまさりたり、見る人涙を流したり、哀に悲しき事は宜しき事なりけり。中納言殿は京出はて給ひて、丹波さかひにて御馬に乗らせ給ひぬ、御車は返し遣すとて、年頃仕はせ給ひける。牛飼わらはに、此牛は我形見に見よとて給へば、わらはは伏しまろびて泣くさまことわりにいみじ。御車は都にき我御身は知らぬ山路に入らせ給ふ程ぞいみじき。大江山といふ所に、中納言宮に御文書かせ給ふ。こゝまでは平らかにまうできつきて侍る。かひなき身なりとも、今一度参りて御覽せられてや、止み侍りなむと思ひ給ふるに、なむいみじうくるしう侍る。御有様ゆかしきなど、哀に書續け給ひて、

憂きことをおほほの山と知りながら、いと深くもいるわが身かな。

となむ思給へられ侍る、など書給へり。宮には哀に悲しう、萬を思ひ感はせ給ひて、物も覺はさせ給はず、唯ならぬ御有様に、かくさへ成らせ給ひぬる事と、返々内にも女院にもいみじきこしめしおぼす。

尼地藏見たてまつる事 (宇治拾遺物語)

今は昔丹波國に老いたる尼ありけり。地藏菩薩は曉ごとによりき給ふ事を仄に聞きて、曉ごとに地藏見奉らんとて、ひとよかゝい惑ひありくに、博打のうちほうけて居たるが見て、尼公は寒きに何事し給ふぞといへば、地藏菩薩の曉にありき給ふなるに逢ひ参らせんとて、かくありくなりといへば、地藏のありかせ給ふ道は我こそ知りたれ、いざたまへ、逢はせ参らせんといへば、あはれ嬉しきことかな、地藏のありかせ給はん所へ、我を率ておはせよといへば、我に物を得させ給へ、やがて率て奉らんといひければ、この着たる衣奉らんといひければ、いざ給へとて、隣なる所へ率て行く。尼悦びて急ぎ行くに、其所の子にちぞうといふ童ありけるを、それが親を知りたりけるによりて、ちぞうはと問ひければ、親あそびにいぬ、今來なんといへば、くはこゝなり、地藏のねはします所は、といへば、尼うれしくて、袖の衣を脱ぎて取らすれば、博打は急ぎ取りていぬ、尼は地藏見参らせんとて居たれば、親どもは心得ず、などこの童を見んと思ふらんと思ふほどに、十ばかりなる童の來たるを、くはちぞうといへば、尼見るまゝに、是非をも知らず伏し轉びて、拜み入りて、土にうつぶしたり。童はへを持ちて遊びけるまゝに來たりけるが、その楚して、手すさびのやうに額をかけば、額より顔の上までさけぬ、さけたる中より、えもいはずめでたき地藏の御顔を

見給ふ。數多拜み入りてうち見上げたれば、かくて立ち給へれば、涙を流して拜み入り参らせて、やがて極樂へ参りにけり。されば心にだにも深く念じつれば、佛も見給ふなりけりと信すべし。

ももとせに一とせたらぬ

つしも加み

鉢も縁ふらし 傍兄中一仔細相懸

平安朝ト鎌倉時代ト比較

平安朝

貴族的

優美

華者

思想疎遠

花の平氏人平氏

鎌倉時代

平氏的

雄壮

優美

思想疎遠

多々隱道者平氏

### 第四章 鎌倉時代

#### 總説

平氏倒れて源頼朝幕府を鎌倉に開きし時より、後醍醐天皇の建武中興に至るまで、即ち紀元千八百年代の中葉より、千九百年代の末葉に至るまでを鎌倉時代と云ふ。

初め政柄武門に歸して、平氏先づ起こるや、一門皆公卿となり、萬事藤原氏に擬し、終に其覆轍を蹈みて、久しからずして又亡びぬ。源氏これに鑑みて、初めて武道を以て政治の主義となししかば、平安朝以外に特色ある文學は、初めて此時代に至つて顯はれたり。諸種の戦記文、東鑑、貞永式目の文の如きものこれなり。然るに、歌は、古今集以來徒らに巧を文字の末に争ひし後を承けて、漸く衰運に向ひぬ、





自ら飄逸脱俗の姿あり。家集を山家集と云ふ。以上三人は新古今集中の泰斗なり。

鎌倉右大臣實朝は定家の弟子なりしかど、専ら萬葉の古調を慕ひて、新古今以外、別に一家を成しぬ。其咏適健なるもの多し。家集を金槐集と云ふ。

守覺法親王家の五十首歌に

藤原定家

春の夜の夢の浮橋とだえして、峯に別かるゝ横雲の空。

霜よふ空にしをれしかりがねの、歸る翅に春雨ぞふる。

三ツノ歌、西行法師すゝめて百首歌よませ侍りけるに 全

見渡せば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕暮。

五十首歌奉りし時

藤原家隆

櫻花夢かうつゝかしら雲の、たはてつれなき峯の春風。

題しらず

ながめつゝ思ふもさびし、久方の、月の都の有明の空。

全

秋

三ツノ歌、西行法師、最勝院、秋、心工身もあはれはれり、鳴らばりたりと春

獨對月

西行法師

まことゝはたれか思はん、ひとり見て、後にこよひの月をかたらば。

題しらず

津の國の難波の春は夢なれや、あしの枯葉に風渡るなり。

道のべの、清水流るゝ柳影、しばしとてこそ立とまりつれ。

題しらず 三ツノ歌の一

寂蓮法師

さびしさは其色としもなかりけり、まき立つ山の秋の夕暮。

月前松風

ながむれば千々に物思ふ月に又、我が身ひとつの峯の松風。

五十首歌奉りし時に湖上花

宮内卿

花さそふ比良の山風吹きにけり、漕ぎ行く舟のあと見ゆるまで。

題しらず

式子内親王

花すゝき又露ふかし、ほにいでゝ、ながめじと思ふ秋のさかりを。

夏月をよめる

源頼政

庭の面は、まだかはかぬに、夕立の、空さりげなくすめる月かな。

難波の春、何は手をも春の北は夢の境をよる

全

秋

夏

秋

秋

春

秋

秋

青柳の糸もてぬける白露の、玉こきちらす春の山風。

源

實

朝

武士の矢なみつくろふ籠手の上に、あられたばしる那須の篠原。

全

全

山はさけ海はあせなん世なりとも、君にふた心われあらめやは。

二、今様宴曲。催馬樂すたれて、今様ひとり流行せりしが、此期の

末に、宴曲といふもの起りぬ。今様を長く連ねて、朗詠を混じたる如

きものなり。

慈鎮和尙

四季 (今様)

慈 鎮 和 尙

春の彌生の曙に、四方の山邊を見渡せば、花盛りかもしら雲の、かゝらぬくま  
ぞなかりける。

花桶も匂ふなり、軒のあやめもかをるなり、夕暮さまの五月雨に、山杜鵑な  
りして。

秋の始めになりぬれば、今年も半過ぎにけり、わがよふけ行く月影の、かたむ  
く見るこそ哀なれ。  
冬の夜寒の朝ぼらけ、契りし山路は雪深し、心のあどはつかねども、思ひやる  
ころ哀なれ。

秋興

蕭颯たる涼風一時の秋を告ぐとかや、槐花雨に潤ふ桐葉風涼し、林をいろどる  
紅葉、綠苔を掃ふもてなし、是皆秋の興を増し、色々にみゆる百種千種の花のひ  
も、早解けそむるいと萩に、亂れて結ぶ白露、薄霧の立つ旅衣の、袖かどまが  
ふ初尾花、分け行く末もはるくど、ほのかにきけば妻籠に、男鹿鳴野の眞葛  
原、未枯れぬれば蟲の音も、絶々よわる夕暮、よしさらば今夜はこゝに宿らん  
男山、花にあだ名は立ちぬども、我脱ぎ懸けん藤袴、なまめき立てる女郎花、  
げにそものならぬ色なれば、あたりのゆかりまでも心置かるゝ夕露の、手枕さ  
むきかりがねの床、第一に心を病ましむる何の處にかすぐれたる、月の明なる  
前此夜はじめて長ければ、かうくたる星のあけなんとする曉、壁に背ける灯  
の幽にのこる窓の中。

散文

此時代には、漢語漢文脈を混じたる戦記文の類、初めてあらはれしかど、平安朝の文章に似たる文章も、なほ未だ滅せず。其種類より云へば、日記、紀行、歴史、物語、隨筆、戦記文、及び平家物語等の語り物あり。

一、日記、紀行。定家の子、爲家の室なる阿佛尼の十六夜日記、後深草院の辨内侍（辨内侍、辨内侍）の日記有名なり。共に平安朝の文に倣ひて作りたるものにして、閑雅なる文章なり。其他中務内侍日記、源親行（源親行、源親行）の東關紀行、源光行の海道記等あり。

二、歴史物語。中山忠親の水鏡、作者詳らかならざる今鏡をおもなるものとす。水鏡は神武天皇より仁明天皇に至るまで五十四代の事跡を記したるものにして、文體頗る大鏡に似たり。今鏡は榮花物語に倣ひて作りたるものにして、榮花の後を承けて、後一條院よ

方丈記  
今定家  
鳥羽院

り高倉院の頃までを記せり。皆平安朝の名文に比して遜色あることを免れず。其他舊話を聚めて、教訓の資となしたる十訓抄（十訓抄、十訓抄）作者未詳、今昔物語の體裁に倣ひて編みたる古今著聞集（古今著聞集、古今著聞集）橘成季著は文體稍新らしくして、中古文より戦記文に移らんとする過渡を示すものなり。

三、隨筆。鴨長明の方丈記は唯一の有名なる隨筆なり。其見聞せし大火、飢饉、大風、大地震等を基として、厭世の感慨を記したるものあり。中古の文脈に多く漢語を交へ、適健にして、信僣ならず、叙事叙情ともに縦横自在の致あり。

長明は京都加茂神社の社人なり、和歌に巧なるを以て後鳥羽上皇に召されて、和歌所の寄人（寄人、寄人）となる。後、社司とならんとして許されざりしかば、遂に出家して蓮胤と號し、大原山に方丈の室を造りて、此

に住す。方丈記と四季物語とは其著書の主要なるものなり。  
 四、戦記文。亦歴史上の物語なれども、従來の歴史物語が、専ら皇室、攝關等殿上の事蹟を記するに専なりしに似ず、主として武家の興亡、戦鬪の勝敗を記するものなれば、其文章も亦閑雅優美なる榮花、大鏡の文と全く撰を異にせり、これ戦記文としてことにこゝに區別する所以なり。

戦記文に、保元平治の戦亂を記したる保元物語、平治物語、源平兩氏の盛衰を記したる源平盛衰記あり、皆作者を詳らかにせず、或は葉室大納言時長の著なりといへど、前二書と後一書とは其文體稍異なれば、學者多くこれを疑ふ。されど要するに三書ともに、漢語俗語のみならず漢文脈をさへ交へて、或は勇壯快活なる、或は悲痛慘澹たる人事の高調を、最も適切に描破したるものにして、此時代の散

四季物語  
 保元平治物語  
 源平盛衰記

保元平治物語  
 源平盛衰記  
 平家物語

平家物語  
 源平盛衰記  
 平家物語

文の粹と稱せらる。

五、平家物語。此書は平家の盛衰を記したる一種の戦記にして、諷誦せんが爲めに作られたるものなり。此書も、葉室時長の作なりといひ、或は信濃前司行長の作なりといへど、終始佛教思想より成りて、又頗る佛語に富めるを見れば、或は僧徒の手に成りしものならんか。行文最も流暢、まゝ律語に似たるところあるは其特質にして、後世の謠曲、浄瑠璃等の起原なるが故に、ことに普通の戦記以外に表出しぬ。義経記、曾我物語はこれと同種類のものなり。

十七日の條 (十六夜日記)

十七日の夜は、小野の宿といふ所にとまらる。月出で、山の峯にたちつゝきたる松の木の間、けぢめみわていとおもし、こゝは夜ふかき霧のまよひに、たどりいでつゝ、さめが井といふ水夏ならばうち過ぎましやとおもふに、かち人はなほ立よりてくむめり。 自分か望みしつゝ

平家物語  
 源平盛衰記  
 平家物語

西平の如き水に濁る心をすゝぎなば、うきよの夢やさめがぬの水。

どろおぼゆる。美濃國關の藤川わたるほどに、まづおもひつゝけつゝ。

わがこども君につかへんためならで、わたらましやは關の藤川。  
正多集、手塚の由、関の川、花をすゝぎ、表はけん、手塚、まづ

不破の關屋の板庇は、今もかはらざりけり。  
ひまればきき不破の關屋はこのほどの、時雨も月もいかにもるらん。

關よりかきくらしつる雨、しぐれに過ぎてふりくらせば、みちもいとあしくて心よ

り外に、笠縫のむまやといふ所に、くれはてねどといまる。

旅人は、簀うちにはらふ夕暮の、雨にやどかる笠縫の里。

人世の無常 (方丈記)

〇

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは、

かつきえかつ結びて、久しくとゞまる事なし。世の中にある人と住家と、又かくの如

し。玉敷の都のうちに、棟を並べ、豊をあらそへる、たかきいやしき人のすまゐは、代々

をへて盡きせぬものなれど、是をまことかどたづぬれば、むかしありし家はまれな

り。あるは去年やぶれて今年には作り、あるは大家ほろびて小家となる。すむ人も之に

あなじ。處もかはらず、人もあほかれどいにしへ見し人は、二三十人が中にわづかに

句の如く書し

天の雲、雨の如く

此處

一人二人なり。朝に死に夕にうまるゝならひ、たい水の泡にぞ似たりける。しらず、う  
まれ死ぬる人、何方よりきたりて、いつ方へか去る。又しらず、かりのやどり、誰が爲め  
にか心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。其あるじとすみかど、無常をあらそ  
ふさま、いは朝がほの露にことならず。あるは露落ちて花残れり、残るといへども朝  
日にかれぬ、あるは花はしほみて露なほきえず、消えずといへども夕をまつことなし。

實盛討たる事 (源平盛衰記)

平家の侍、武藏の國の住人、長井齋藤別當實盛は、我れ七十有餘に年闢けたり、今は後  
榮期する事なし。終に遁るべき身にあらざ。何れの國にても死なん命は同じ事と思  
ひ切つて、赤地の錦の鎧直垂に、黒糸威の鎧を着、十八差したる石打の征矢負うて、只  
一人進み出で、死生知らずにぞ戦ひける。木曾の手に、信濃國住人、手塚太郎光盛と  
云ふ者あり、實盛に目を懸けて歩ませよる。實盛もまた手塚に目を懸けて進んでか  
ゝる。手塚近寄りて、誰人ぞ、只だ一人残り留りて軍し給ふは、大將軍か侍か。心にくし  
名乗れ。斯く申すは、信濃國諏訪郡住人、手塚太郎金刺光盛と云ふ者なり、よき敵予名  
乗り給へや、組み給へと云ひ懸けて、互に駒を早めたり。實盛申しけるは、あゝさる者  
ありと聞く。思ふ様あり名乗まじ。汝を嫌ふには非ず、只だ首を取つて源氏の見參に

入れよ、能き所領の價あるべし、徒に淵瀬に捨つべからず、木曾殿は見知り給はんずるなり。思ひ切つたれば一人留まりて戦ふなり、敵は嫌ふまじ軍の習は勝負をするこそ面白けれ、寄り合はせ手塚と云ふまゝに弓をば捨て、無下に近づき寄合す、手塚が郎等、主に組ませじとて、馬手に並べて中に隔てたり、實盛押並べてむずと組む、己は手塚が郎等にや、餘すまじと云ふまゝ、鎧の押付の板をつかまへ、左の手にて手綱かいぐり、左右の鎧を強く踏んで引き落とし、馬の腹に引付けて提げもてゆく足は地より一尺許り舉りたり、手塚是を見て郎等を討たせじとて、馳せ並べて、敵の鎧の袖に掴み付きて、曳首を出して鎧を越え我先にぞ落ちたりける、實盛二人の敵にあひしらはんどせし程に、三人組み合うて、馬より下へ落ちたりけり、實盛手塚が郎等押へて、刀を抜き、頸を搔く、手塚其間に實盛が弓手の草摺引き上げて、柄も拳も透れどさし、臑て上に乗れり得て、頸を搔き、水も溜らず切りけり。

手塚敵の首を郎等に持たせて、木曾の前に持つて行き申けるは、光盛癖者の頸取つて候、名乗れど申せば存ずる旨あり、名乗るまじ、木曾殿は御覽じ知るべしと計りにて名乗らず、侍かと思れば、錦の直垂を服たり、大將軍かと思へば、續くものなし、京家西國の者かと思れば、坂東聲なりき、若き者かと思へば、面の皺七十餘りに疊めり、老

者かと思れば、鬚鬚黒うして盛りと見ゆ、何者の首ならんと申す、木曾打案じて、あれ武藏の齋藤別當にや有らん、但し其は一年少目に見しが、白髪 of 精毛に生ひたりしかば、今はことの外に白髪になりぬらん、鬚鬚の黒きはいかゞやらん、面の老様はさもやと覺ゆ、實に不審なり、樋口は古同僚見知りたるらん、とて召されたり、髻を取り引き仰げて、一目打見てはらゝと泣き、空無慙や、實盛にて候ひけりと申す、いかに鬚鬚の黒きは、と問ひ給へば、樋口、されば其事思ひ出でられ侍り、實盛日頃申置き候ひしは、弓矢取者は、老體にて軍陣に向はんには、髪に墨を塗らんと思ふなり、其故は、合戦ならぬ時だにも、若き人は白髪を見てあなづる心あり、况や軍場にして進まんとすれば、古老氣なしと惡み、退く時は、今は分に叶はずと誇らん、實に若き人と先を諍ふも憚あり、敵も甲斐なき者に思へり、悲き者は老の白髪に侍り、されば俊成卿述懐の歌に、

澤に生ふる若菜ならねど、徒らに、年をつむにも袖はぬれけり。

と讀み侍るとや、人は聊の物語のついでにも、後の形見に、言をば殘し置くべき事に侍る。云ひしに違はず、墨を塗りて候ひけり、年來、内外なく申し、事の哀さに、樋口次郎兼光、水を取り寄せて、自らは是を洗ひたれば、白髪尉に成りける、さてころ一定

實盛とは知れにけれ。大國の許由は、耳を潁川の水に濯ひて、名を後代に留め、我朝の實盛は、髪を戦場の墨にそめて、悲みを萬人に催したり、木曾宣ひけるは、親父帶刀先生をば、悪源太義平が討ちたりける時、義仲は二歳に成りけるを、畠山に仰せて尋ね出して、必ず矢ふべしと傳へたりけるに、如何か稚き者に刀を立てんとて、我は知らざる由にて、情深くこの齋藤別當が許へ遣して、養へど云ひければ、請け取り養はんとしけるが、七箇日置いて、東國は皆な源氏の家人なり、我れ人に憑まれて、此兒を養ひ立てざらんも人ならず、育ておかんもあたりいふせしと案じなして、木曾へ遣しける志偏に實盛が恩にあり。一樹の蔭、一河の流れと云ふためしもあるなれば、實盛も義仲が爲には七箇日の養ひ父、危き敵中を計らひ出だしける、其志争でか忘るべきなれば、此首よく孝養せよとて、さめくと泣きければ、兵共も各々袖を絞りけり。』  
抑々、實盛、石打の征矢を負ひ、錦の鎧直垂を着る事は、今度北國へ下りける時、内大臣に申しけるは、實盛、東國の打手に下向して、矢一も射ず、蒲原より歸り上りし事、老の耻と存じ候ひき。今度北陸道に罷り下りなば、年闕け身衰へて侍れ共、眞先蒐けて討死せん事勿論なり、實盛所領に付いて、近年武藏に居住なれ共、本は越前國の住人にて、北國は舊里なり、先祖利仁將軍、三人の男を生む、嫡男越前にあり、齋藤と云ふ、次男

加賀にあり、富樫と云ふ、三男越中にあり、井口と云ふ、彼等の子孫繁昌して、國中互ひに相親む。されば三箇國の宗徒の者共、内戚外戚に付いて、親類一門たらざるものなし。實盛討死して候は、當國他國の者共集りて、別當は何をか着たる、如何なる裝束をかしたると、見沙汰せん事耻かし。故郷へは、錦の袴を着て歸ると云ふ事に侍れば、今度生國の下向に、錦の直垂に、石打の征矢御免を蒙り候はん、且は最後の御恩なりと所望申しけれど、初めは免し給はざりけるが、既に打立處に、實盛思ひ切つたる顔の氣色、且つは哀れに思ひ、且つは軍を勸めんが爲に、大臣の、我料とて秘藏せられたりけるを取り出して下し給へり。實盛畏り給はりて、千秋萬歳の心地して予着たりける。是を聞きける大名小名、袖を絞らぬはなかりけり。

鳥羽僧正の事 (古今著聞集)

鳥羽僧正は、近き世にはならびなき繪書なり、法勝寺金堂の扉の繪書きたる人なり。いつ程のことにか、供米、不法の事ありける時、繪にかゝれける。辻風の吹たるに、米の俵をおほく吹き上げたるが、塵灰の如くにあがるを、大童子、法師ばらはしりより取りとめんとしたるを、誰かしたりけん、その繪を院御覽じて、御入典ありけり。その心を、僧正に御尋ありければ、あまりに供米不法に候ひて、實の物は入り候はで、糟糠

源隆圓(子丁)  
此の繪書に  
鳥羽僧正  
實盛と稱す





なる漢文、或は日本化したる漢文とも稱すべきものにして、此時代の普通文として、法令、日記、記録等に用ゐられたり、東鑑、貞永式目、明月記の類の文これなり。今一例を左に抄出す。

可修理神社專祭祀事（貞永式目）

右神者依入之敬増威人者依神之德添運然則恒例之祭祀不致凌夷如在之禮奠莫令怠慢因茲於關東御分國々并庄園者地頭神主等各存其趣可致精誠也兼又致有封社者任代々符小破之時且加修理若及大破言上子細隨其左右可有其沙汰矣。

如在ノ礼也  
神在

### 第五章 室町時代

#### 總説

紀元千九百年の末葉、後醍醐天皇の建武中興より、南北朝、足利、織田、豊臣時代を経て、紀元二千二百年代、徳川氏の元和偃武に至るまでを總稱して、室町時代と云ふ。蓋し京都室町に覇府を置きし足利氏の世が、此時代中、最も長年月なりしが故なり。

此時代は過半戦亂の世なれば、四民皆自營に急にして、文筆を弄する閑日月に乏しかりければ、文學は殆んど、極衰の域に達し、僅かに一縷の命脉を、僧侶遁世者の間に保ちぬ。されば文學の見るべきものは、多く僧侶、隱者の手に成れり。

謠曲、連歌及び太平記、徒然草等は、此時代の文學の主要なるものに

暗黒大いんぼ  
極衰

室町時代史考  
狂言  
連歌  
御歌  
中流  
御歌  
中流

して其なかに連歌が、足利時代の小康に際して、稍下層の社會にも行はれしことは、頗る注意すべき事なり。蓋し下層社會の文學が、此時代に至りて、大に盛ならんとする機微を示すに至りしは、實に文學の一轉機、一進歩として見るべきなり。

律語

短歌益衰へて連歌流行し、前時代に顯はれたる語り物は發達して、謠曲と稱する一種の律語となりぬ。この謠曲は實に此時代の最大文學なり。

一、短歌。前時代の衰運を受けて、師範家の所謂歌道は彌煩雜を極め、口傳傳授の如きこと行はれて、短歌は益衰へぬ。此時代には風雅集以下五種の勅撰集あれども、皆見るに足らず、却つて南朝弘和年中、宗良親王の撰び給ひて、勅撰に準ぜられし新葉集と、頼阿法師

水戸の海老原の撰  
仲三十一二二代集  
下唱

五田令世  
歴代和歌勅撰考  
校訂  
増補勅撰作部歌  
因史院發行

の草庵集とを有名なるものとす。而して紀元二千年の頃、後花園天皇の永享年中に撰ばれし新續古今に至りて、勅撰の例全く絶えぬ。古今集より此集に至るまで、勅撰二十一集あり、これを二十一代集と云ふ。  
以同五百三十一等

此時代の歌人は、頼阿、兼好等二三の僧徒外聞ゆるものなし、皆初期の人なり。頼阿は初め藤原貞宗と云ふ出家して比叡、高野に學び、後京都に歸住す。歌を以て屢北朝の光嚴天皇に召されき。草庵集の外、井蛙抄、愚問賢答等の歌學の著書あり。兼好は頼阿の親友にして、其歌又伯仲の間に在り。されど彼は歌人としてよりは、寧ろ散文家として有名なり。

二、連歌。短歌の上の句と下の句とを分ちて、二人にて詠ずる連歌は、奈良時代より起りしが、其連歌を又數多連ねて、五十句百句千

井蛙抄  
愚問賢答  
二條良基編纂

句等と成したる連歌前時代より起こり、此時代に至りて初めて盛  
 に流行しぬ。北朝の後光嚴天皇の延文元年、二條良基、僧救濟等菟玖  
 波集を撰し、勅撰に準ぜらる、これ連歌集の始なり。後宗祇法師又新  
 菟玖波集を撰す。蓋し連歌は其用語自由にして、短歌の如く古語の  
 みを襲用することなきが故に、古學の知識なきものもこれを弄ぶ  
 ことを得て、一時大に民間に流行し、下層社會に頗る文學趣味を流  
 布しぬ。

此時代には周阿、救濟、宗砌、宗祇、宗長、肖拍等、有名なる連歌師多きが  
 なかに、宗祇法師最も名あり。宗祇は連歌の最盛時代なる後土御門  
 天皇の時に、出で、古今無比の名人と稱せらる。又短歌に巧にして、  
 有名なる古今傳授の祖、東常縁アヲマシネノキが第一の弟子なり。  
 三、謠曲。前時代より行はれし田樂、猿樂等發達して、能と稱する

結崎次郎後次、觀所、  
 子元清、世防、  
 武生光集

全盛、  
 全剛、下、表微、  
 文章、下、大、  
 日、  
 二、  
 全、  
 大、  
 初、  
 多、  
 徳、  
 大、  
 大、

舞樂此時代に顯はれ、この樂に合せて語るが爲めに、平家物語等の  
 語り物に、今様、宴曲等を折衷して、創作したる、特殊の律語を謠曲と  
 云ふ、會話の部分を除けば、總て宴曲に似て、七五調の中に古歌、朗詠  
 等、を挿み、宛轉流暢の妙を極めたり。蓋し此時代の文學中、最も貴重  
 なるものにして、此時代より江戸時代の初期までに成りしもの二  
 百篇に上れり。其構造は或は歴史上の事實に假託し、或は當時の巷  
 談を敷衍したるものにして、因果應報、無常寂滅の教理を説きたる  
 もの頗る多ければ、此時代の他の文學と同じく、僧侶、遁世者等の手  
 に成りしものなるべけれど、作者の名は多く没して傳はらず。

河上春月

順阿法師

たが袖の憂きならひより霞むらん、  
 涙の川の春の夜の月。

閑居

かくれ家も今は尋ねじ、いつくにも、  
 さてすまふこそ静かなりけれ。

世をのがれて木曾路といふところを過ぎて 兼好法師  
思ひたつ木曾のあさぎぬあさくのみ、染めてやむべき袖の色かは。

夜述懐

全

こしかたの世のうきことをかろふかも、ぬられぬ夜半の鳴の羽かき。

夕立

宗 祇 法師

行きなやみてる日にたのむ木のもとは、ぬるども出でん夕立の空。

河越千句の一節(連歌)

續群書類從卷四十五

遠く見て行けば霞まぬ春野かな。

宗 祇

明る梢ののどかなるころ。

義 藤

月うすし、峯の櫻にうつろひて。

道 眞

ほのくらしき江に水落つる山。

心 敬

浪さむく、火を焚く村の夕間暮。

満 助

かく長く連ねたる連歌は、上の句或は下の句を共有せる、數多の短歌の連続の如きものにして、第一句と第二句或は第二句と第三句の如く、すべて相隣れる二句が、短歌の上の句、下の句の如き關係を有せるのみ、數句或は全體に通じては、何等

前(三) 後(三) 天女 巫下  
ワキ(後)

の意味もなし、江戸時代の俳諧も亦これに同じ。

竹生島(謡曲)

臣下竹に生るゝ鶯の、竹生島詣いそがん。「そもそも、これは延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり。さても江州竹生島の明神は靈神にて御座候ふ間、此たび君に御暇を申し唯今竹生島に參詣仕り候ふ。」四の宮や、河原の宮居末はやき、名も走井の水の月、くもらぬ御代に逢坂の、關の宮居を伏し拜み、山越ちかき志賀の里、鴉の浦にも着きにけり。「急ぎ候ふほどに鴉の浦に着きて候ふ。あれを見れば、釣舟の來り候ふ、しばらく相待ち、便船を乞はばやと存じ候ふ。」

漁翁れもしろや、頃は彌生のなかばなれば、波もうららゝに海のれも、廻霞みわたれる朝ぼらけ、漁翁のどかに通ふ船の道、漁翁廻うきわざとなきころかな。  
漁翁これは此浦里に住みなれて、明暮はこぶうろくづの、二人數を盡して、身ひとつを、助けやせんとわび人の、ひまも波間に明けかれて、世をわたること物うけれ、よし、同じわざながら、世にこねたりな、此海の、名所ねほき數々に、浦山かけてながむれば、志賀の都花園、むかしながらの山櫻、眞野の入江のふなよばひ、いざさしよせて事問はん。

臣下「いかに是なる船に便船申さうなう。漁翁これは渡し船にてもなし。御覽候へ釣船にて候ふよ。臣下こなたも釣船と見て候へばこそ便船と申せ。これは竹生島にはじめて参詣の者なり。誓の船に乗るべきなり。漁翁げに、此所は靈地にて歩み運び給ふ人を、とかく申さば御心にも違ひ、又は神慮もはかりがたし。」  
 廻さば、れ船を参らせん。臣下うれしや、さてはむかひの船、法の力とればえたり。  
 漁翁けふは殊更のどかにて、心にかゝる風もなし。地名こそさゝ波や、志賀の浦にれ立ちあるは、都人かいたはしや、れ船にめされて、浦々を、ながの給へや。  
 處は海の上、國は近江の江に近き、山々の春なれや、花はさながら白雪の、ふるか残るか時しらぬ、山は都の富士なれや。なほさえかへる春の日に、比良の嶺ねろし吹くとても、沖こく船はよも盡きじ。旅のならひの思はずも、雲井のよそに見し人も、同じ船に馴れ衣、浦をへだて、行くほどに、竹生島も見えたりや。  
 漁翁緑樹影沈んで、地魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮んでは、兎も波を走るか、れもしろの島のけしきや。漁翁、舟が着いて候ふ、御上り候へ。臣下あらうれしや、やがて神前へ参り候ふべし。漁翁この尉が御道しるべ申さうずるにて候ふ、これこそ辨財天にて候へ、よく御祈念候へ。臣下承り及びたるよ

時、山は上は空に下は  
 清夜月影沈んで、  
 漁翁舟が着いて候ふ、  
 御上り候へ。

りもいやまさりて、有りがたう候ふ、不思議やな、此島は女人禁制とこそ承りて候ふに、あれなる女人は何とて参られて候ふぞ。漁翁それは知らぬ人の申しごとにて候ふ。かたむけなくも此島は、九生如來の御再誕なれば、殊に女人こそ参るべけれ。」  
 廻なう、それまでもなきものを、地辨財天は女體にて、ろの神徳もあらたなる、天女と現じおけしませば、女人とてへだてなし。たゞ知らぬ人の言葉なり。  
 かゝる悲願をおこして、正覺年ひさし、獅子通王のいにしへより、利生さらにあこたらず。漁翁げに、かほど疑ひも、地荒磯じまの松陰を、たよりによする海人小舟、われは人間にあらずとて、社壇の扉をれしひらき、御殿に入らせ給ひければ、翁も水中に入るかと見しが、白浪の立ち返り、われは此海のあるじぞ、と云ひすて、また、波に入らせ給ひけり。  
 地御殿しきりに鳴動して、日月ひかりかゝりやきて、山の端いづる如くにて、あらはれ給ふぞかたむけなき。天女そも、これは此島に住んで、神をうやまひ國をまもる、辨財天とはわが事なり。地その時、虚空に音楽きこゆ、花ふりくだる春の夜の、月にかゝりやく少女の袂、かへすくもあもしろや。  
 地夜遊の舞樂も時すきて、月すみわたる海づらに、波風しきりに鳴動して、下

界の龍神あらはれたり。龍神湖上に出現して、ひかりもかゝやく金銀珠玉を、かのまれ人にさゝぐるけしき、ありがたかりけるきどくかな。龍神もとより衆生濟度の誓ひ、地もとより衆生濟度の誓ひ、様々なれば、或は天女の形を現じ、有縁の衆生の諸願を叶へ、又は下界の龍神となつて、國土を鎮め誓ひを現はし、天女は宮中に入らせ給へば、龍神はすなはち湖水に飛行して、波を蹴立て水を返して、天地に群がる大蛇の形、天地に群がる大蛇の形は、龍宮に飛んで、入りける

散文

此時代に顯はれたる散文の有名なるものは、徒然草、太平記、正統記、増鏡の四書と狂言記とあるのみ。其他當代の博學、一條兼良の公事根源、花鳥餘情、北畠親房の職原抄、元々集などは學問上甚だ有益なるものなれども、文學として傳ふべきものに非ず。

一、徒然草。兼好法師の隨筆なり。文體は方丈記に似て、筆力は其

徒然草 兼好法師撰、三巻  
 花鳥餘情 兼好法師撰、三巻  
 職原抄 北畠親房撰、三巻  
 元々集 兼好法師撰、三巻

太平記 兼好法師撰、三巻  
 正統記 兼好法師撰、三巻  
 増鏡 兼好法師撰、三巻

上に在り。其得意なる無常觀を論ずる邊の適健なる、其物語に擬したる小品文の婉麗なる、上、枕草紙に亞ぎ、下、江戸時代の和漢混合文の作者の好模範なりき。

兼好は吉田の神官卜部兼顯の子なり。出家して東國に遊び、後歸りて雙岡に住す、没せし時残すところ、數卷の冊子と、黒衣二襲とのみなりしと、又以て其生平を窺ふに足るべし。遺稿は徒然草の外に、兼好法師家集あり。

二、太平記。南北朝の爭亂を記したる戰記にして、作者は小島法師と稱する僧なりと云ひ、或は有名なる博學の僧、玄慧法師の作なりとも云ふ。其文章の壯大なること盛衰記に亞ぎ、流暢なること或はこれに過ぎたり。後、此書を朗讀すること行はれて、太平記讀と稱す、今日の軍書讀の初なり。





の嘲やあらん、行末難なくしたため設けて、年ごもあればこそあれ、その事またん程あらじ、物騒しからぬやうに、など思はんには、えさらぬことのみいとかさなりて、事の盡くる限もなく、思ひ立つ日もあるべからず、大體、人を見るに、すこし心ある際は、皆このあらましにて、予一期は過ぐゆる、近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ、身を助けんとすれば、耻をも顧みず、財をも捨て、去るぞかし、命は人を待つものかは、無常のきたることは、水火の攻むるよりも速に、遁れがたき物を、その時老いたる親、いとけなき子君の恩、人の情、すてがたしとて捨てざらんや。

正成兵庫に下向の事 (太平記) 十六卷

尊氏卿直義朝臣、大勢を率して上洛の間、要害の地に於て防ぎ戦はむために、兵庫に引き退きぬるよし、義貞朝臣、早馬を進らせて内裏に奏聞ありければ、主上大に御騒ぎありて、補判官正成を召されて、急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力を合せて合戦致すべし、と仰せられければ、正成長りて奏しけるは、尊氏卿、已に筑紫九國の勢を率して上洛候ふなれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらむ、御方の疲れたる小勢を以て、敵機に乗りたる大勢に懸合ひて、尋常の如くに合戦を致し候はば、御方必定打ち負け候ひぬと覺候ふなれば、新田朝臣をも京都へ召し候ひて、前の如く山門へ臨幸

成り候ふべし、正成も河内へ罷り下り候ひて、畿内の勢を以て河尻を差し塞ぎ、兩方より京都を攻めて、兵糧をつからし候ふ程ならば、敵は次第に疲れて落ち下り、御方は日々に隨ひて馳せ集り候ふべし、其時に當りて、新田朝臣は山門より推し寄せられ、正成は搦手にて攻め上せ候はば、朝敵を一戦にて滅ぼす事ありぬと覺候ふ、新田朝臣も定めて此料簡候ふとも、路次にて一軍もせざらんは、無下にいふかひなく人の思はんずる所を耻ぢて、兵庫に支へられたりと覺候ふ、合戦はどてもかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ、能く遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候ふ、と申しければ、誠に軍旅の事は兵に譲られよと諸卿僉議ありけるに、重ねて坊門宰相清忠申されけるは、正成が申す所も其謂ありと雖も、征伐のために差し下されたる節度使、未だ戦を成さざる前に、帝都を捨て、一年の内に二度まで山門へ臨幸なさん事、且は帝位の輕きに似、又官軍の道を失ふ所なり、縱令尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東入箇國を従へて上りし時の勢にはよも過ぎじ、凡戦の始より、敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりと雖も、毎度大敵を攻め靡けずといふことなし、是全く武略の勝れたる所にはあらず、只聖運の天に叶へる故なり、然れば只戦を帝都の外に決して、敵を鉄鉞の下に滅ぼさん事、何の仔細かあるべきなれば、只

時を替へず捕罷り下るべしと仰出されける。正成此上はさのみ異議を申すに及ばずとて、五月十六日に都を立ちて、五百餘騎にて兵庫へ下りける。正成是を最期の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ様ありとて櫻井の宿より河内へ返し遣すとて、庭訓を遣しけるは、獅子子を産みて三日を経る時、數千丈の石壁より是を擲ぐ、其子獅子の機分あれば、教へざるに中より跳返りて、死することを得ずといへり。況んや、汝己に十歳に餘りぬ、一言耳に留まらば我教誠に違ふことなかれ。今度の合戦、天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見んことを是を限りと思ふなり。正成己に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りと雖も、一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死残りてあらん程は、金剛山の邊に引籠りて、敵寄せ來らば命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是を汝が第一の孝行ならんずると、泣々申し合めて、正成主上より賜はりたる菊作の刀を、形見に見よとてとらせ、各東西へ別れにけり。昔の百里奚は、穆公、晉の國を伐ちし時、戦の利なからん事を鑑みて、其將孟明視に向ひて、今を限りの別れを悲み、今の補判官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びんことを愁へて、其子正行を留めて、な

き跡までの義を進む、彼は異國の良弼、是は吾朝の忠臣、時千載を隔つと雖も、前聖後聖一揆にして、有り難かりし賢佐なり。正成兵庫に着きければ、新田左中將やがて對面し給ひて、叡慮の趣を尋ね問はれける。正成畏りて、所存の通りと勅定の様とを、委しく語り申しければ、誠に敗軍の小勢を以て、機を得たる大敵に戦はむ事、叶ふべきにてはなけれど、去年關東の合戦に打ち負けて、上洛せし時、路にて猶支へざりし事、人口の嘲り遁るゝ時を得ず。それこそあらめ、今度西國へ下されて、數箇所の城廓一も落し得ずして、結句敵の大勢なるを聞きて、一支もせず京都まで遠引したらむは、餘にいふかひなく存ずる間、戦の勝負をば見ずして、只一戦に義を勧めばやと存ずるばかりなりと宣ひければ、正成重ねて申しけるは、衆愚の謬々たるは、一賢の唯々には如かずと申し候へば、道を知らざる人の讒をば、必ずしも御心に懸けらるまじきにて候ふ。只戦ふべき所を見て進み、叶ふまじき時を知りて退くこそ、良將とは申し候ふなれ。さてこそ暴虎憑河死而無悔之者、不與と、孔子も子路を誡められし事の候ふ。其上元弘の初には、平大守の威猛を一時にくだかれ、此年の春は、尊氏の逆徒を九州へ退けられ候ひし事、聖運とは申しながら、偏に御計畧の武徳に依りし事にて候へば、合戦の方に於ては、誰か補し申し候ふべき、殊更、今度西國より御上洛の

上御沙汰の次第一々道に當りてこそ存じ候へど申しければ、義貞朝臣誠に顔色解けて、通夜の物語に、數盃の興をぞ添へられける。後に思ひ合すれば、是を正成が最期なりけりと、哀なりしことどもなり。

恩賞を争ふ者を誡むる論 (神皇正統記)

王土に生れて、忠を致し身を棄つるは、人臣の道なり。必ず、これを身の高名と思ふべきに非ず。然れど後の人を勵まし、その跡をあはれびて、賞せらるゝは、君の御政なり。下として、きはひ争ひ申すべきには、あらぬにや。まして、させる功もなくして、過分の望をいたすこと、自ら危むるは、しなれど、前車の轍をみること、はまことにあり難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをばいましめられき、豪強になりぬれば、必ずをこる心あり、果して身を亡ぼし、家を失ふためしあれば、いましめらるゝも、理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の、源平の家、に屬することを止むべしといふ制符、度々ありき。源平久しく武をとりて、仕へしかども、ことある時は、宣旨を給はりて、諸國の兵をめし、しけるに、近代となりては、やがてかたをいゝやからあほくなりしによりて、この制符は下されき。果して今迄の亂世の基なれば、いひ甲斐なきことになりけり。この頃のことわざには、一度軍にかけあひ、或は家の子郎徒

節に死ぬるたぐひもあれば、わが功にたきては、日本國を賜へ、もしは半國を賜はりても、足るべからず、など申すめり、まことにさまて思ふ事は、あらじなれど、やがてこれよりみだるゝは、しどもなり。又朝威のかるゝし、さも、たしは、からるゝものなり。言語は、君子の樞機なりといへり。おからさまにも、君を蔑にし、人にをこることはあるべからぬ事にこそ。さきに記し侍りし如く、かたき氷は霜を踏むよりいたる習なれば、亂臣賊子といふものは、その始、こゝろ言葉をつゝしまざるよりいでくるなり。世の中のおどろふると申すは、日月の光のかはるにも、あらず、草木の色の改まるにも、あらず、人の心のあしくなりゆくを、末世といふにや。中略、大かたおのれ一身は、思にほこるとも、萬人に恨をのこすべき事をば、なか顧みざらん。君は萬性の主にて、ましませば、限ある地をもちて、限なき人に、わかたせたまはん事は、おしては、かり奉るべし。もし一國づゝを望まば、六十六人にて、塞がりなん。一郡づゝといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は、喜ぶとも、千萬人の人は、よろこばじ。いはんや、日本の中、悉皆ながら、望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。斯る心の萌して、言葉にもいで、面には、づる色のなきを、謀反のはじめといふべきなり。

水無瀬殿 (増鏡)

鳥羽殿、白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡り住ませ給へど、猶又、水無瀬といふ所に、いもいはずおもしるき院づくりして、しばし通ひおはしましたしつゝ、春秋の花もみぢにつけても御心ゆくかぎり、世をひかして、遊びをのみぞし給ふ。所がらもはるく、と川にのぞめる眺望、いとおもしろくなむ。元久の頃、詩に歌を合はせられしにも、とりわきてこそは、

見わたせば、山もどかすむみなせ川、ゆふべは秋と女にあもひけむ。  
かやぶきの廊、渡殿などはるく、と、艶におかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゞずまひ、苔深きみやま木に、枝さしかはしたる庭の小松も、げに／＼千世をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々あまためして、御遊びなどありける後、定家の中納言、いまだ下臈なりし時に奉られける。  
ありへけむもとの千年にふりもせで、わが君ちぎるみねのわか松。  
君が代にせきいるゝ庭をゆく水の、いはこそす数は千世も見にけり。

櫻諍 (狂言記)

主人是は此あたりの者でござる。此頃は何方も、花の盛ぢやと申す程に、花見に参りたう存ずれども、暇がなさに、参ることも致さぬ。もはや暇に成てござる程に、今日

は花見に参らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼び出し、申し附けう。やい、太郎冠者あるか。太郎冠者はあ、主人ゐたか。冠者御前に居ります。主人、汝を呼び出すこと別のことではない。此頃は方々の花の盛ぢやといへども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。もはや暇になつた程に、花見に出うと思ふが、何と有らうぞ。冠者、是は珍らしいことを被仰ます。此頃は櫻の盛ぢやと申す程に、櫻を御覽せられうと有れば、尤でござるが、珍らしからぬはなを御覽せられて、何とせらるゝ。主人、いや、たのれは何事をいふ。櫻も花も同じ事ぢや。冠者、是は頼うだ人も覺ゆぬことを仰せらるゝ。左様に被仰たらば、人中で恥をかゝせられう。身共は苦しうござらぬが、主人して汝が其様にいふは、仔細が有るか。冠者、なか／＼、仔細こそござれ。はなが見させられたくば、私の鼻を見させられい。餘所へござるまでもござらぬ。主人、いや、たのれは言語同断のこと。をいひをる。汝が顔なけ鼻といふ。花といふは別ぢや。冠者、左様ではござらぬ。歌などにも、櫻とはよまれたれども、花とはよまれませぬ。主人、なか／＼でもないことをいひをる。其歌をようて聴かせい。冠者、ようで聴かせたらば、きもをつぶさせられう。主人、いらいでよめ。冠者、心得ました。櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪がふりける。是は何と。主人、こちにも花といふ歌がある。冠者、さらばようで聴かせ

られい。主人行き暮れてこの下陰を宿とせば、花は今宵の主ならまし。冠者此方にも  
 まだござる。山櫻霞の間よりほのかにも見えし人こそ戀しかりけれ。主人それなら  
 此方にも有る。花の色はうつりにけりな、いたづらに、我身よにふるながめせしまに。  
 冠者それならば、此方には、謠にござる。主人謠へ、聽かう。冠者櫻かざして、袖ふれて、主  
 人一段の謠うたふ。致しやうがござる。やい太郎冠者、花見車暮るゝより、月の花よ、  
 またうよ。冠者はあこれですまりました。主人總別何も知りをらないで、むざとした  
 ことをいひをつて、某とせりあひをる。あつちへうせい。冠者はあ、主人えい。冠者はあ、

花見車暮るゝより、  
 さくらあけ、  
 神あはれ花見車、  
 暮るゝより月の花  
 またふよ

徳川時代の文學

以前

一、大正天皇(神武)下、大正天皇(神武)下、  
 二、アルユル種族ヲ其臣トシテ  
 三、主義ヲ儒教主義トシテ考テ  
 四、東面ニテ、淫儀ノモノイラス  
 五、光緒時ハ前期、中心トシテ、關西ニアル  
 六、文化文政ノ時代ハ、後期、中心トシテ、關東ニ行ル

第六章 江戸時代

總説

紀元二千二百七十年代、徳川氏の元和偃武より、二千五百二十年代、  
 明治維新に至るまでを江戸時代と云ふ。  
 此時代の初、京都には、後光明天皇の漢學を講じ給ふあり。關東には、  
 徳川家康の藤原惺窩、林道春等の漢學者を召して、文教を奨勵する  
 あり。前時代に於て、將に一たび滅せんとせし漢學は、是に於て大に  
 盛運に向ひぬ。而して、國文に於ては、俳諧、發句、淨瑠璃、小説等の通俗  
 なる文學が、先づ戰餘の無學なる社會に歡迎せられしが、太平稍久  
 しきに及びて、中古文を解釋すること漸く行はれて、遂に元祿の古  
 學復興となり、寛政前後の雅文流行となりぬ。これと同時に、文字の

知識は、ますます、下層社會に傳播せしかば、通俗文學も亦、益、發達せり。されど、復古派の歌文は高古に偏し、通俗文學は卑近に流れ、ともに中正を得ざりしを、此の期の終に出でたる桂園派の歌と、次に説かんとする漢學者の和漢混合文とは、能くこれ等の弊を脱して、今日の歌文の模範とはなりぬ。

抑、我國の漢學は、古來隋唐の古説を守りしを、惺齋、道春等は、夙に宋の程朱の學を講じ、一時の名儒皆其門に出でしかば、天下靡然としてこれに歸せしが、中頃より、中江藤樹の陽明學、伊藤仁齋の古學、荻生徂徠の古文辭學等起り、各門戶の見を持して、相争ふに至りぬ。又木下順庵の一派あり、其學、程朱を奉ぜしかど、最も該博を重んじて、新古の漢學のみならず、國學をも兼修せしかば、此時代の初期より漸次發達し來りし和漢混合文は、主として此派によりて大成せ

られき。

江戸時代の文學は、かく複雑にして豊富なるがなかに、白石の和漢混合文、眞淵の長歌、宣長、春海の雅文、景樹の短歌、巢林子の淨瑠璃、西鶴、馬琴の小説、芭蕉の俳諧等は、此時代の國文學を代表するものなり。而して漢文には、林家編纂の本朝通鑑、水戸家の大日本史、頼山陽の日本外史等、著名なる日本歴史の書あり。其他、林道春の羅山文集を始めとして、名家の詩文集あげて數ふべからず。

律語

連歌は一轉して俳諧、發句となり、謠曲は淨瑠璃となり、謠ひ物には小唄、長唄等の俗謠行はれ、通俗ある律語大に起りしが、元祿の頃に至りては、短歌再び勃興せしのみならず、奈良朝以後久しく絶へたる長歌さへ起りぬ。今此時代の律語を歌、狂歌、俳諧、俗謠、淨瑠璃

の五種として説かんとす。

一、歌。初期には、前時代の歌道極衰の後を承けて、拙劣なる師範家流の短歌のみ僅に行はれしが、元祿の古學復興期に伴ひて、萬葉集の歌風を慕ふもの漸々輩出しぬ。これを萬葉派（元祿以後）といふ。元祿以後の有名なる國學者は、多く此派の歌人なるがなかに、僧契沖、加茂眞淵、本居宣長、村田春海、加藤千蔭等最も有名にして、皆短歌のみならず長歌にも巧なりき。ことに眞淵の長歌は、萬葉の骨髓を得て、人丸赤人の高調に亞ぐと稱せらる。其家集に縣居歌集、加茂翁家集あり。この二書と契沖の漫吟集、宣長の鈴屋集、春海の琴後集、千蔭のうけらが花等との長短歌は、この派の歌を代表するものなり。然るに、眞淵等の歌が強いて古語を弄するの弊あるを見て、専ら平易なる語を用ゐ、且つ「しらべ」即ち歌の聲調と其意味との調和を主

文化五六の頃

張したるものを、此時代の末に出でたる桂園派の短歌とす。桂園は香川景樹の家の名なり。門下に八田知紀、熊谷直好、穂井田忠友、渡忠秋等有名なる歌人多し。

桂園、四天王、  
慶應義塾、  
明治三年卒

景樹は因幡の人、荒木某の子にして、京都の歌人香川黃中の養子となり、從五位下肥後守に叙せられぬ。近く天保の末年（十四）に死したる人なれば、今日もなほ其門人の生存せる者あるべし。家集を桂園一枝と云ふ、其歌體の嶄新にして巧妙なること、殆んど新古今を凌がんとす。

其他、有賀長伯、富士谷成章、小澤蘆庵、網代弘訓、橘守部、蓮月尼等、亦頗る歌に名ありき。

高崎正風、八田知紀、  
門下、  
改、今宮中、  
桂園派

三屋 倭文子をかなしめる歌

賀茂 眞淵

ちゝのみの父にもあらず、はゝそばの母ならなくに、泣く子なす、我を慕ひて、

空多傳作

秋あき思おもひつる子は、初秋の露に匂へる、真萩原衣まはぎのへらするどや、招まねくなる尾  
 花はなとふとや、鹿子かじのひとり出でたち、うらぶれて野邊のへにいきと、聞きし  
 より日ひにけにまてと、うつたへにこども聞きけず、父ちちならぬ我われとやとはぬ、母ははな  
 らぬ身みとてやうとき、戀こひしきをの、初風の吹きうらかへす、秋の野の葛くわの裏  
 葉はの、うらぶれていにしろの子は、萩見はぎみにと行きやはしつる、霧きりわくとまどひ  
 やはせし、現まし身みはかなしきかもよ、歸かへり來きぬ道みちにすぎぬと、家人いへの告つげつる  
 ものを、ねいらくは、ねほしきことを、ひたぶるに思おもふがまゝに、忘わするべきわざ  
 ならぬをも、たつ霧きりのまどひけらしな、まどひつゝあらばあらし、なにすと  
 かまさかを知りて、さら／＼に、新喪あらたなのことも、嘆なげきしぬらん。

反歌

萩が花見ればかなしな、いにし人歸らぬ野邊に、匂ふと思へば。

あらし  
あらきする新喪の秋は、立つ霧の思ひ惑ひて、過しだにせし。

思ふことをよめる歌

本居宣長

思ふこといはずやまめや、もろこしのからの心の、世の人は聴かずともよし。  
 今こそは聴かずありなめ、大直日神おほなほひのかみし在あませば、真心まごころに又もかへりて、ますぐ

袖の神

にし聴く世はあらんを、思ふこと心にこめて、いはずやまめや。  
 正月あたらの六日ばかり、よべの雪の名残見んとて、隅田川すみだがはに舟を泛べて。

文章最上

村田春海

水をのぼる隅田河原の、河舟も、行く方遠き、上つ瀬の堤を見れば、白雪になは  
 埋もれて、下草の緑もわかず、立ちならぶ木々の梢は、春の日をはやく待ちに  
 て、うら／＼とけふりそめたり、下つ瀬をかへり見すれば、氷居こゑし葦邊あしべの洲島すまじま  
 波の上に友呼びかはし、遠方とほや、霞の間より、夕虹ゆふにじのたつかとばかり、久方ひさの  
 雲居くもに高く、かゝる長橋。

反歌

消きせずは明日もとひ來ん、隅田河、河遠かへ、白く降れる沫雪。

立秋

下河邊長流 大和守院人

夏衣なつぎうすきものは知らざりし、袂たもとねぼゆる秋の初風。

題しらず

長原ながはらの山やまに、秋の初風

つひにわが着てもかへらぬ唐錦からにしき、たつ田たつやなにの故ゆかりさとの山。

深更歸雁

僧契冲



華の葉の別れも行くか雁がねの、難波堀江のまだ夜ふかきに。

遠村梅

はつせのや、里のうなるに宿とへば、霞める梅のたち枝をぞさす。

伊勢物語の中に、月やあらぬとよめるところの心を。

月夜よし、梅咲きたりとたれつけて、あれたる宿に去年を戀ふらん。

題知らず

荷田春満

世にしげき言の葉ぐさを吹きわけて、家の風をもつたへてしがな。

寄灯述懐

はかなしや、わが身ひとつの窓の内も、てらしかねたる夜半の灯火。

花

加茂真淵

うら／＼とのどけき春の心より、にほひいでたる山櫻かな。

低月

にほどりのかつしか早稲のにひしほり、くみつゝをれば、月かたぶきぬ。

早秋

うきものと思ひも入れて、秋風を、うらめづらしくすぐすころかな。

月夜よし、梅咲きたりとたれつけて、あれたる宿に去年を戀ふらん。

述懐

たまく／＼に人どある世を憂き時は、そむかまほしく思ふはかなさ。

嵐

信濃なるすがのあら野に飛ぶ鷲の、つばさもたわにふく嵐かな。

曙落花

本居宣長

有明の月はいそがぬ真木の戸に、雪ふき入るゝ花の春風。

我が肖像に題す

敷島のやまとこゝろを人とはい、朝日に白ふ山ざくら花。

詠史二首

ねもほさぬ隠岐の幸行きくときは、賤の男われも髪さかだつも。

わだのそこねきついくりにまじりけん、君のまもりの劔太刀はや。

題しらず

村田春海

をさまれる御世の守の梓弓、ひきなゆるべそものゝふの道。

山家暮春

日永さも訪はれぬまゝに知られけり、花より後の春の山里。



月前落花

八田知紀

おぼつかな、臘月夜に、散る花の、行くへは風も知らずやあるらん。

葉平朝臣 詠史

真心のあとは千世まで残りけり、雪ふみわけし小野の山里。

二、狂歌。狂歌も亦短歌の一體なり。古より歌人の遊戯として稀

に行はれしかど、此時代の中頃より漸く流行して、天明の頃に至り

ては、數多の名人出でたるがなかに、蜀山人、六樹園最も名あり。

蜀山人は姓名を太田覃と云ひ、又、四方赤良、南畝等の號あり。江戸の

士なり。頗る和漢の學に通じ、好んで滑稽諷諷の間に放浪す、蓋し二

代の奇士なり。其狂歌の妙、古今無比と稱せらる。千紫萬紅、蜀山百首

は其歌集なり。六樹園は有名なる辭書、雅言集覽の著者、石川雅望の

號なり。其狂名を宿屋飯盛といふも、江戸の旅館の主人なりけれ

ばなり。雅文にも巧なりしが、狂歌は其最も長ずるところなり。

大屋東狂  
海丸里人  
紀、赤凡  
木、端  
純全  
多田人成  
手加田博  
朱葉菅江

夜は静しと敵

狂歌候概  
全書室

母の中にかほりて、さものほり、蜀山人蜀山人

生酔の禮者を見れば、大道を、横すぢかびに、春は來にけり。

一面の花は碁盤の上野山、黒門前にかゝる白雲。

杜鵑鳴きつる跡に、あきれたる。後徳大寺の有明の顔。

今更に何か惜しまん、神武より、二千年來暮れて行く年。

宿屋飯盛

母、まきり、歌よみ歌よみは下手こそよけれ、天地の、動き出してはたまるものかは。

三、俳諧、發句。俳諧とは、俳諧の連歌の略稱にして、通俗なる言語

を以て作りたる連歌の義なり。發句とは、連歌中の最初の一句を稱

する名なりしが、後、其最初の句のみを作ること流行して、これをも

發句、或は俳句と稱するに至りぬ。

抑、室町時代に流行したる連歌は、なほ多く古語を用ゐるものなり

しを、彼の時代の末に、山崎宗鑑、荒木田守武等俳諧を創めて、専ら俗









なされ、眞人とも割り入つて相談。有る金なれば、役に立てまい物でなし。五十年六十年の夫婦の中も、儘にならぬは女のならひ。必ず我を怨んでばし下さるなど、いふ内に、燈火に映る刀の光。お吉びつくり、今のは何ぞ、與兵衛様、「イヤ、何でも御座らぬと、脇差背後に押隠す、それぞれ、屹度目もすはつて、なう恐ろしい顔色。其右の手爰へ出さしやんせ。」あつと脇差持ちかへて、「是見さしやれ、何も無い」と、云へ共お吉身もわななく、「ア、こな様は小氣味の悪い。必ず傍へ寄るまいと、跡退りして寄る門の口、明けて逃げんと氣を配れど、「ハテ、きよるきよる、何あそろしいと、付け廻し、出合へどわめく一聲、二聲待たず、飛懸かり、取て引絞め、音ばね立つるな、女め」と、喉笛の鎖をぐつと刺す、刺されて惱亂手足をもがき、「そんなら聲立てまい、今死んでは年はもいかぬ三人の子が流浪する、それが可愛い死にとも無い金も入る程持つて御座れ、助けて下され與兵衛様、「オ、死にとも無い筈、尤もく、こなたの娘が可愛い程、己も己を可愛いがる親仁がいとし、金拂うて男立てねばならぬ、諱らめて死んで下され、口で申せば人が聞く、心でお念佛、南無阿彌陀、南無阿彌陀佛と、引き寄せて、右手より左手のふと腹へ、刺してはるぐり、抜いては切る。お吉を迎ひの冥土の夜風、はためく門の轆の音、あねちに賣

塲の火も消えて、庭も心も暗闇に、打まく油流る、血、踏のめらかし、踏すべり、身内は血潮のあかづら、赤鬼、邪見の角を振り立て、お吉が身をさく劔の山、目前油の地獄の苦痛、軒の菖蒲のさしもげに、千々の病はよくれ共、過去の業病遁れぬ、菖蒲刀に置く露の、たまも亂れて、息絶えたり。』日比の強き死顔見て、ぐつと我から心もおくれ、膝節がたたく、がたつく胸を押しさげ、さげたる鍵を追つ取つて、窺けば蚊帳のうちとけて、寝たる子供の顔付さへ、我を睨むと身も震へば、つれてがらつく鍵の音、頭の上に鳴雷の、落ちかゝるかど肝にこたへ、戸棚にひつたり、引出す財囊、上銀五百八十匁、宵に聞いたる心當、ねぢ込み、ねぢ込みふところの、重さよ、足もおもくれて、薄氷を履む、火焔踏む、此脇差は、せんだの木の、橋から川へ、沈む來世は見ぬ沙汰、此世の果報の付け時と、内をぬけ出で、一さんに、足に任せて……

曾我虎が戀の一節 源頼朝 五十八年 作 近松門 左衛門

(上略)向うのねがたどうくど、俄に瀧の落るが如く、菅原、菅原、辻風起る其響き、幾年功経る猪の、猪矢四五本負ひながら、真下りに落せしは、牛鬼なんども謂つべし。父の祐經、大勢引具し聲をかけ、「矢先にては適ふまじ、大石枯木と投



げかけ、縮めて獲れや」と 下知をなし、八方より取巻て、木の枝土壤手頃の石  
 雨の如くに投げかくる。猪は怒つて猛りをかき、牙を研ぎ、鼻嵐を吹き掛け  
 寄すればバツと退き、退けば續いてかゝり、追つ返しつ、揉合ひしが、飛藪つて  
 雜兵二人、左右の牙に引かけ、二三間ひらりと投げ、人穴さして飛び入りしは、  
 凄じかりける猛勢なり。祐經穴を差覗き、あれ／＼中にて吼る聲未だ與まで  
 行つかず、取つて返すは必定穴の口に鍵先揃へ、突止めよ。「承ると、立ち並び、今  
 や／＼と待つ所に、内より土風、土煙、半臂に弓籠手、狩袴、大太刀佩いたる武士  
 の、猪の胴骨馬乗に、頭を背後、尾筒を手綱に乗せながら、迂鳴り出でたる暴猪  
 の、鍵も矢先も事ともせず、寄り付くものを駈り散らし、山を崩し、立木を折り、  
 乗手は落ちじと締付れば、猪は落さん／＼と、谷に駈り、尾上に飛び、眞なご  
 混りの砂利土に、足をつばと踏込んで、怯む處を指添抜き、既に突かんと振  
 り上ぐれば、祐經聲をかけ、「ヤア、ヤア、猪に乗たるは、新田の四郎忠常なもど其猪  
 は、此祐經が、人穴へ追ひ込むだり。然れば手柄は二人の手柄假へ御邊が突き止めて  
 も、先の手柄は祐經を、後日に前後を争ふな、其爲詞を番ふた」と、いはせも果てず  
 いや、是れ、前後の争ひはいざ知らず、……あれ小藤太、突き留めて奪ひ取

れ。「心得たり」と 寄るところを、猪は四つ足をぐつと抜き、小藤太が左の股高  
 膝節かけてさらりとかけ、仁田を其まゝ乗せながら、崖も岨も嫌ひなく、岩  
 を蹴割つて飛んで行く。

### 散文

此時代の散文は、其種類極めて雑多にして、等しく隨筆にして、雅文  
 なるあり、和漢混合文なるあり、等しく小説にして、平安朝の物語に  
 似たるあり、或は戦記文に似たるあり、或は通俗文なるあり、同種類  
 の著書も、其文體相異なるもの多きが故に、今は専ら其文體より區  
 別して、和漢混合文、雅文、通俗文の三種として論ぜん。  
 一、和漢混合文。和文、漢文ともに俗耳に入り易からず、通俗文は  
 疎野に過ぎたり。されば初期以來の漢學者は、文教の普及を圖りて、  
 一種の文體を創めぬ。そは、前代の戦記文、隨筆等に似て、一層漢文の

分量を多くしたるものにして、所謂和漢混合文なり。  
 初期以來の漢學者は、皆多少此種の文を能くせしがなかに、新井白石、貝原益軒、室鳩巢等の文、最も名あり。  
 新井白石、名は君美、白石は其號なり、幼にして穎悟、長ずるに及びて大志あり、文學を以て家を成さんことを期し、當時の鴻儒、木下順庵の門に入りて精勵刻苦、遂に博覽卓識を以て聞ゆ。六代將軍家宣、未だ甲府の藩邸に在りし時、召されて儒官となり、命を奉じて、慶長五年より延寶八年に至るまで八十餘年間、三百三十七諸侯の家譜を撰びぬ。和漢混合文の粹と稱せらるゝ藩翰譜即ちこれなり。後、家宣將軍の統を繼ぐに及びて、又召されて幕府に仕へ、功を以て從五位下筑後守に叙任し、俸祿千石を賜ひき、將軍吉宗の代に至りて其畫策多く用ゐられざりしかば、乃ち職を辭して閑居し、専ら著述に從

藩翰譜  
 吉宗召して  
 幕府に仕へ  
 功を以て從五位  
 下筑後守に叙任し  
 俸祿千石を賜ひき

事しぬ。著書三百餘種の中、其文章を以て有名なるものは、藩翰譜の外に、自叙傳、折たく柴の記、及び史論、讀史餘論等あり。白石の文は、能く和文の婉麗と、漢文の遒勁とを併せて、佶偈に陥らず、纖弱に流れず、實に縱横自在の妙を極む。蓋し文を學ぶものゝ好模範なり。  
 貝原益軒は又損軒と號す、名は篤信、福岡の藩士なり。人となり恭謙、學を好み、學問洽博、著書百餘種あり。皆平易なる和漢混合文を用ゐ、婦女童幼すらなほこれを解することを得しむ、其文流暢にして、謹嚴、自ら一家の風を成せり。五常訓、家道訓、養生訓、樂訓、童子訓、初學訓、大和俗訓、女大學等の著書、最も世に行はる。  
 室鳩巢は名を直清といひ、木下順庵の弟子にして、白石の學友なり、白石の推薦によりて幕府の儒官となり、江戸駿河臺に住せしかば、世人呼んで駿臺先生といひぬ。其著、駿臺雜話、鳩巢小説、最も著名な

益軒  
 折たく柴の記

養生訓  
 童子訓

女大學  
 初學訓



候ふ御用の事あらば承りなんすといふを、今思ひ合すれば參河守殿の初めて御參ありし時、仙千代丸といふ兒の御供したるを、殿下の御覽じて、あれは家康がうちにて三奉行とかいふうちの、鬼作左衛門といふものゝ子乎と仰せありしかば、おそろし〜鬼も子を生むにや、鬼の子は如何なる者にやとて、物越に入々の見たりしに、其親の鬼ならばさこそあらめ。さればこそ、これへ參る度毎に、家康返り候はんと、その事は、いまだ御沙汰も聞え候はぬやと、おど〜ひもいひしぞ、けさもいひしぞ、待遠にや思ふらん、あはれ家康とくしてかへさせたまへかし、となきくどきて、此由を大廳へ申しければ、大に驚きなげきたまひて、日々に御消息ありて、徳川殿をどくかへさせたまへ、こなたのありさまのいふせき、いつの世にかは忘るべきなど、ありし事もこま〜と仰せ遣はされし程に、ほどなく御歸國ましまし、大廳歸りのぼらせ給ひければ、女房たち涙を流し、なさけなくも御母上を下したまひしものかな、鬼本多とかやが、かくこそいうたれ、どこぞ計らうてさむらひつれ。今は朝日の姫君をまるらせたまへば、徳川殿の御ためにも、大廳は御母上にも候ふを、如何に鬼なればとて、己が主の事知らぬことや候ふべき、それにかく辛き目を見せ參らせて侍れば、はやはや徳川殿に仰せられて、如何なる罪にもあはせて、大廳の御恨をも晴らさせたま

へと、とり〜に訴へければ、關白殿笑はせ給ひて、家康はよき者どもあまた召し仕ひけり、秀吉もその如き家人をば、ほしき事に候ふぞや、とばかりのたまひて、御座をた〜せたまひしとなり。

## 池田輝政父子の敗軍（藩翰譜）

秀吉また、北畠殿をうしなひ奉らんとせしとき、信輝が父子、秀吉が方人して、まづ手合に、犬山の城を攻めおとす。徳川殿は北畠殿を助けて、清洲の城に至りたまひ、天正十二年三月十七日、御方の人々まづ森武藏守長一が羽黒の陣を打ち破つて、秀吉の多勢にむかひ、小牧の山に陣をとる。同じき四月四日、勝入、秀吉の陣に行き向つて、徳川が勢日々に馳せあつまるどみねて、小牧のかたき多勢になつて候。今は家康が國々に残る勢多からむ。まづ三河國をおそひ取て候はんには、一定小牧のかたきも破れつべうおぼえ候といふ。秀吉よくはかつてこそ答ふべけれど、入道を返さる、明れば五日の朝、入道また來りて、家康、篠木、柏木の郷人等を催し、彼ほとりに要害かまへて、軍勢こむべしと承る。道のほどふさがらぬうちに、三河の國に向は〜やといひしかば、秀吉甥の三好孫七郎を大將とし、池田、森が勢と同じく、三河國を襲はんとす。三好も森も入道が聲なれば、かさねて軍の檢使をこふ。堀久太郎秀政を加へらる。同

じき六日の夜半より打ちたつ。秀吉もやがて犬山をたつて、樂田に陣を移さる。同じき九日のあした、入道岩崎の城せめおとし、心よげに、首ども實檢して居たるに、後陣にうつたる大將、三好が一萬騎、徳川殿の先陣にうちやぶられ、散々になつてにけ來る。堀久太郎秀政追ひ來るかたきをまぢかけて、まつさきに切つてかゝる。森も池田も續いてかゝる。徳川殿に出であうて、堀が軍勢たちまちにみだれたつて、武藏守長一すでにうたれ、池田が勢もやぶれしかば、信輝入道馬うしなつてかちだちになり、堀が勢と一處にならんとす。其間はるかにへだりぬ。かたきは間近かく追ひつめたり。これまでと思ひけん、胡床に坐してかたきをまつ、永井傳八郎直勝おちあひて首をとる。年つもつて四十九歳、嫡子紀伊守之助生年廿六、安藤彦四郎直次がため討たれてけり。

輝政手の兵散々にうちなされ、信輝之助うたるゝとき、一處にこそ討死すべけれど、とて取つてかへす。輝政の家人伴大膳、其頃いまだ厩の舍人なりけるが、たゞ一人追ひつきて馬の口にすがり、引かへして一鞭あつ。輝政いかつて、あつばれ不覺の奴かなど云ふまゝに、鎧の鼻にてかうべくだけよと蹴たりける。蹴られてちつともひるまず、やあ若殿こそ不覺なれとて、片手に轡をしつかと執つて、片手は鞭をあてゝは

す、馬はさすがに逸物なり、鞭はしきりにあてられぬ。飛ぶがごとくにはせゆけば、輝政腹にすねかねて、つゞけさまに蹴りしほどに、かうべことゝく蹴かゝれて、ながるゝ血遍身紅に染まれども、なほ放ちやらざれば、力及ばずして引退く。

○ 樂訓の一節

貝原益軒

春たちしより、年の暮れ行くまで、いるが如くにおもほゆれど、時日の早く過ぎゆくは止めあへず。うべもとしと名づけ、又ときといへるならん。されば光陰箭の如く、時節流るゝが如しといへるも、うける事にあらず。老にむかへば猶さらには、年月の早く過ぐる事、あだかも飛ぶが如し。あとをかへりみれば、いそぢのよはひを過ぎこしもさのみ久しからず。たとひいそぢの後、又いそぢの齡を経て、百とせにいたるとも、なほ行くさきの月日いよゝ早くして、程なくつきなん事、思ひやられ侍り、幾程なき残れる齡を、たのしみてこそ過ぐさまほしけれ。うれへくるしみて、空しく過ぎなんはいどおろかなりや。年々に花は相似たれど、しづかに人は同じからず。老かさなれば、一年の内にも、やうやく衰へゆきて、今の昔にしかず、後の今にしかざることを知りて、かねてより悔なからんことを思ひ、時日を惜み、一口も徒に過ぐべからず。けふ暮れて、明日もありとてたのむべからず。けふの日のうちを日々惜むべし。

仁の説 (駿臺雜話)

室鳩集

ある時、例の人々とぶらひ来て講習しけるが、仁義の説に及べり。中にひとりいひけるは、人は天地の心を得て心とす。天地は萬物を生ずるを以て心とする故に、それを得て心とすれば、人は人を愛するを以て心の徳とする事勿論なり。よりて仁は心之徳、愛之理といへり。心の徳とあれば、仁義禮智諸共に仁に漏るゝ事なき程に、仁は四者を含みて義も禮智も仁によりて立つなり。是れは翁の講説にてかねて承りし事にて侍る。但し、仁は人を愛する心にあらずや、それを衆善の長とすること、たれも知りたるやうに候へども、大かたは、人はたゞ慈悲を第一とするを以て、仁を衆善の長とするとばかり心得侍る。それは慈悲の重き事をいはい、しかいうてもやみなまし。今仁を心の徳とするは、さやうの一通りの淺き事にてはあるまじく候。いかなれば慈悲の心ひとつが心の徳となりて、義も禮も智も仁なければうせほろぶるにやあらん、と工夫すべき事にて侍る。このところを今少し承りたくこそ候へ。翁聞きて、只今申さるゝ所すこしもちがひなく聞え侍る。されば口頃申したる外に改めて申すべき事もなく候へども、猶更委しく申し候は、心の仁あるは人の元氣あるが如し。人の元氣は脈にあはれ、心の元氣は愛にあはる。脈のかよひ絶ゆれば人死する

如く、愛の理ほろぶれば心死する程に、仁は心のいのちとも申すべし。夫れ心は活物なるにより、人に情あり、物の哀を知りて、常にいきたる物予かし。よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒徳を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞きては必ず感ずる事を知り、不義を聞きては必ず耻づることを知る。もし情なく、愛を知らずは、其心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなりなん、何をもちて自愛し、何をもちて恭敬せん。義を聞きて感ずる事なく、不義を聞きても耻づる事なかるべし。是をもていふに、仁義禮智いづれも心の徳にして、各其理分るれども、其本源は仁に外ならず。人として不仁なれば、義も禮も智も其さまあり、其用ありといへども、所詮、内より生ぜぬば、眞の徳にあらず、公の理にあらず。この故に、仁に心の徳といひて、外に徳をいはず。仁に愛の理といひて、外に理をいはず。そのいはずる所に、ふかき意ありとしるべし。

親不知の險 (東西遊記)

橋南齋

越中越後の堺に、親不知子不知といふ所あり、北陸道第一の難所として、普く人の知る所なり。越中立山の裾、北海へ張り出でたる所にて、市振といふ驛より、歌村といふ

所までを、山の下と稱して、二里半あり。立山の裾なる故に、斷巖絶壁にて路徑も付けがたき故に、波打際を旅人通行する事なり。一方は壁を立てたる如き山、一方は大海なり、風なく波靜なる日は、旅人通行する道幅七八間或は十間斗りあり、又所によりて、半丁一丁もある所あり、然るに風起り波荒き時は、直に彼絶壁の所へ波打かけて通路なし。右二里半のうちに一ヶ所、長さ五六町の間、別に道幅狭き所あるを、世に親不知子不知といふ甚だ難所にして、親も子を思ふにいとまなしといふ心より、土俗稱し來りたるなり。其間絶壁の根に岩穴ありて、十間程づゝ置きて、其穴いくつもあり。波の打よする時は、通行の人此穴へ走り入りて波の引く時を見合せて走り過ぎ、又波來れば、次の穴に入りて是れを避く。もし北風強きときは、數日を歴るといへども通行ならずとなり。去々年も、越後の商人越中に越ゆるとて、此所を無理に通るかゝり、中程にて波風殊に強くなり、件の穴に逃げ入りたるに、穴際まで大波打かけて走り過ぐべき隙なく、八日が間、其穴の中に居、やうやう波風靜まり、命たすかり、其穴を出たり。其間の饑渴心遣ひ、言ふに詞なしと語れり。波高き日、無理に通るかゝり、穴中に避け隠れて出づべき隙なく、二日三日穴に居る人は、年々多き事とぞ、余が通行せし時は雨天にて、波風はさのみ強からざりしかども、上の山は傾くが如く聳ゆる所

せ來る波は足を引き去れば、其恐ろしき事今に忘れず。余が友富山の佐伯某、此所を通りしに、其身は肩輿に乗り居しが、人足二三十人にて、其肩輿を守護し、波の間を走りぬけては穴へ隠れ、走りぬけては穴に隠れて、やう／＼に過ぎたりと語れり。總じて此邊の人足は、浪を避けて走ること妙を得たり。されば此地の人夫大勢を召連れ行く時は、大抵の浪風には、滞ることなしといへり。扱此親不知を過ぎて、少し山のふどころに人家ある所を歌村といふ。其村を過ぎ、又波打際を行けば、駒返りと云ふ難所あり。此所は、波風無き時といへども、常に山の根へ波打かけ、通路なりがたきゆゑに、絶壁の半に、岩を穿ちて細き道を付け、旅人通行す。其間纜の所なれども、馬上なりがたき故に、駒返りと名付く。馬は兩方の驛より來り、荷物は其纜の所を、人夫にて返り越すことなり。歌村より一里半にして、青海といふ驛あり。此所は山下を通りぬけて、少し廣みなり。市振より青海まで四里の所難所なり。風波の時は、王侯の勢にても越ゆることなり難し。誠に一人是を守れば、萬夫も過ぐることをあたはざる要害の地なり。故に、市振は御領所にて關あり、往來の人を改む。余醫者にて總髮なる故に、別して町陣に吟味ありき。誠に左もあるべし。他所と違ひ、一方は大海、一方は萬仞の高山、南の方へ數十里連り聳ゆるれば、廻りても通るべき道なし。天險とはかゝる所

をいふべし、かほどの難所なれども、夏の頃天氣格別晴朗にして風波靜なる日は、道路に少しの高低もなく、絲を引きたる如き波打際の事なれば、難所とも知らず、只風景のよき所とのみ思ひて、通行する人多しとなり。

二、雅文。附古文學註釋書。元祿の頃より、古文學の研究盛に起こりしかば、古文學に模倣したる歌文亦從つて起こりぬ。其歌は萬葉派の長短歌にして、其文は即ち雅文なり。

此時代の國學者には、古學復興の祖として、僧契沖、下河邊長流、荷田春滿あり。春滿の門に加茂眞淵あり。其門下に、本居宣長、村田春海、加藤千蔭、塙保己一等あり。宣長の子に春庭、門人に、平田篤胤、藤井高尙あり。春海の門に清水濱臣、高田與清あり。保己一の門に屋代弘賢あり。皆所謂復古派の名家なり。其他、北村季吟、伴蒿蹊、富士谷成章、その子御杖、橘守部、足代弘訓、伊勢貞丈等は、此派以外に在りて、皆一方の大家と稱せらる。就中眞淵、宣長、春海、千蔭、濱臣、高尙、蒿蹊等、最も雅文

に名あり。其他の人々も、皆多少雅文を能くせしこと勿論なれど、元來、此時代の國學者には、歌文を作ることよりは、古文學を研究することを以て、本務とせしもの多ければ、從つて、有名なる大家にも、古文學の註釋に専らにして、雅文の著書なきもの尠しとせず、而して、其註釋の書には學者の讀まざる可からざるもの極めて多し。今最も有名なる大家數人の略傳と、其著書とを記さん。

僧契沖、下河邊長流は、ともに難波に住し、夙に古學の研究に従事しぬ。初め、水戸光圀、長流の古文學に精通せることを聞きて、萬葉集を註せしめしが、業を果さずして、貞亨中に没せしかば、契沖又命を受けてこれを完成しぬ。萬葉代匠記これなり。こゝに於て、世人が久しく解釋に苦みし萬葉集は、容易に理解せらるゝに至り、其雄大の調を慕ふもの、相繼ぎて起こりしかば、世人多く此書を以て古學復興

下河邊長流、荷田春滿、加藤千蔭、塙保己一、皆、古文學復興の祖と稱せらる。其門下に、本居宣長、村田春海、加藤千蔭、藤井高尙、清水濱臣、高田與清、屋代弘賢、橘守部、足代弘訓、伊勢貞丈、等あり。皆、復古派の名家なり。其他、北村季吟、伴蒿蹊、富士谷成章、其子御杖、橘守部、等あり。皆、一方の大家と稱せらる。就中、眞淵、宣長、春海、千蔭、濱臣、高尙、蒿蹊等、最も雅文に名あり。



の始とす。契沖又古今餘材抄、勢語臆斷、源註拾遺等、數多の註釋書を著はしぬ。又其和歌の家集を、漫吟集と云ふ。元祿中難波の圓珠庵に没しぬ。

契沖より少しく後れて、古文の註釋につとめし人を、北村季吟とす。初め京都に住し、松永貞徳に従ひて、和歌、俳諧を學び、俳諧にも有名にして、俳書の著頗る多く、松尾芭蕉も其門に出てたり。元祿中、幕府に召されて和歌所に補せられ、子孫長く國文を以て家を成しぬ。源氏物語の註釋、湖月抄、枕草紙の春曙抄、徒然草の文段抄等、最も名あり、其他、八代集抄、土佐日記抄、萬葉拾穂抄、伊勢物語拾穂抄、和漢朗詠集註等、皆考證該博、用意周到、後學者を益すること極めて大なり。荷田春滿は京都稻荷神社の官司にして、契沖につぎて古學復興に志し、嘗て國學の學校を設立せんとして、其計畫略成れりしが、果さ

伊勢物語抄、源氏物語抄、萬葉集、和歌集、枕草紙、湖月抄、徒然草、春曙抄、和漢朗詠集、伊勢物語拾穂抄、和漢朗詠集註等、皆考證該博、用意周到、後學者を益すること極めて大なり。

三上、藤、時、明、作、人、有、百、餘、種、抄、本、有、之、初、め、醫、を、學、び、し、が、後、生、の、大、著、述、に、し、て、歴、史、家、文、學、者、の、至、寶、な、り、其、他、萬、葉、集、玉、の、小、琴、古、今、集、遠、鏡、新、古、今、集、美、濃、家、苞、源、氏、物、語、玉、小、櫛、歷、朝、詔、詞、解、等、精、確

ずして没しぬ。學問深遠にして氣慨あり。著書の草稿多かりしかど、死に臨みて、其説の未熟なるを耻ぢて、焼き棄てしとぞ。故に今世に傳ふるところ、僅々數部の寫本あるのみ。至樂愛、歌、詠、し、と、す、加茂眞淵は、遠江の神官の子なり。春滿の門に入りて古學を研究し、寛保年中出で、江戸に住しぬ。其家を縣居と號せしかば、其門下を縣居派と云ふ。古學の名家多く此派に出で、名聲天下に振ひき。最も和歌及び雅文に長ず。著はす所、萬葉考、古今集打聞、神樂催馬樂考、冠辭考等、古文の註釋頗る多し。其雅文は加茂翁家集にあり。本居宣長は、鈴の屋と號す、伊勢松坂の人なり。初め醫を學びしが、後古學に志して眞淵の門人となりぬ。古事記の註釋、古事記傳は、其畢生の大著述にして、歴史家、文學者の至寶なり。其他、萬葉集玉の小琴、古今集遠鏡、新古今集、美濃家苞、源氏物語玉小櫛、歷朝詔詞解等、精確

歌集

なる註釋書の著甚だ多く、其文章の見るべきものには、鈴屋集、玉勝  
間等<sup>應</sup>あり。世人東滿、眞淵ととも<sup>日本</sup>に國學の三大人と稱す。蓋し其博學  
卓識は、三大人中の隨一なるべく、其筆力の縱横、銳利なることは、白  
石と衡を争ふに足る。實に近世の偉人なり。宣長又初めて國語の文  
法を研究して、詞の玉緒、紐鏡を作る。嗣子春庭、これを祖述して、詞の  
八衢<sup>はつむち</sup>を作り、富士谷成章亦、あゆひ抄、かざし抄等を著はし、以て今日  
の文法書の基を成しぬ。

村田春海と、加藤千蔭とは、ともに江戸に生れ、縣居門の文豪として、  
名を等しうしたる人なり。春海は、漢文の素養あり、故に、其文、秩然と  
して法あり。世或は眞淵に優ると稱す。其歌文の集を、琴後集と云ふ。  
千蔭は又狂文、狂歌に長じ、其雅文も頗る輕妙飄逸の致あり。其家集  
を<sup>歌え</sup>うけらが花といふ。千蔭又別に萬葉略解を著はす、頗る世に行は

江戸に於て他、此の待、  
池子、池屋、池之、  
後、後、後、後、  
ト、ト、ト、ト、

る。千蔭又書リ、  
ハシ後世に傳へん

上に擧げたる書どもの外に、此時代の雅文の見るべきものには、伴  
蒿蹊の閑田水草、清水濱臣の泊々舍集、藤井高尙の松の舍文集、松の  
落葉、白川樂翁の花月草紙、上田秋成の雨月草紙等あり。又古來の雅  
文を編輯したるものに、水戸光圀の撰、扶桑拾葉集、及び高田與清が、  
水戸齊昭の命によりて撰びたる八洲文藻あり、而して平田篤胤の

著、古史傳、塙保己一の編纂したる正續群書類從は、純然たる文學の  
書にはあらねど、又國史家、國文學者の参考に資すべきものにして、  
有名なる大著述なり。

道行ぶりの一節  
岡部日記  
加茂 眞淵  
今日は雲のまよひて富士も見ゆ、原のすそわたりより、雨降りぬべし。明日こそ涉  
るべき川の多きに、水層増さるもぞする。夜をかけてだに蒲原の宿まで、いかで行か  
んとて、夕方より立ちまよふ雲とともに、いそぎつゝ行くに、富士川渉るほどに、空晴



はあらしを、こよひは、寝であかしてまし、などいひつゝ、伊豫籠空しうかゝけて、空のみうちまもらるゝもいとわりなしや。今宵は名に負ふ園生の花も、徒らに夜の錦にて淺茅がもとの松蟲のみ、やうく聲そはり行くも、なほあかぬわざながら、さすがにあはれは添へつべし。

晴れ間なき月をいかにと、いひくゝて、そらながめにや、今宵あかさん。  
かきくらす、雲間の影は、うとくとも、月まつ虫よ、せめて語らへ。

○ 時雨るゝ日ものへまかるとて、人の許へ簀借りにやる書

關山近きあたりの、ことに世離れたる御住居なれば、冬立つけは、ひ物寂しう、人目も草もと思ひとり給ふらんをこそ推し測りまらせ侍れ。やつがり、石山に契りたることありて、今日こゝまでまがでまぬりぬ。晝間過ぐる程より、空うち時雨れつゝ、今日立つ冬のことわりがほに降り出でたるが都をば、あからさまに立ち出でつれば、さる心まうけだにせて侍るこそうたてけれ。

我はたゞ、冬野にひろふ落栗の、みのなきことぞわびしかりける。

となんねぼゆるを、此從者にたうべらば、嬉しうこそ。立ち歸り來んふしは、必ず柴のどぼそ驚かし、まゐらすべし。夕かけて、行く方遠ければ、言も盡し侍らてなん。

冬ノ初と詠多  
深草于朝屋  
山屋冬を  
山屋冬を  
山屋冬を  
山屋冬を  
山屋冬を  
山屋冬を

萬葉集佳調序

萬葉集佳調序  
長春氏

加藤千蔭

春山の花にふれては、文なき衣も、其香にそみ、秋野の萩を分けては、やつるゝ袖さへ、其色に匂へり。されば、上つ世の歌を、常に心にしめなば、降れる世に生れ出でたりとも、自ら其姿の移らざらめや。こゝに長春氏、知らぬ火の筑紫の海の八汐路を経て、この吾妻の遠の御津に渡り、ぬもむろにいにしへぶり語らふついで、旅の宿の心なぐさに、萬葉集のうちのすぐれたるを、長きも短きも選び出で、朝よひに目なれて、すなほにしてあつく、みやびにしてをしき調を、學びなれたよりとせばやと、事はかりす。さはいへ、故郷に歸らん月日も、ほど遠からねばとて、とく讀みはてし、拾ひ出だせり。もれたらんは、後にもとてなん。さてかく拾ひ出でたるを見れば、さながら春秋の野山の錦にたちまじれるこゝちなんしける。故其はしに書きつく。

三、通俗文 和漢混合文が、漢學者に用ゐられ、雅文が國學者に用

ゐられたる如く、通俗文は多く戯作者、俳人等に用ゐられたり。其文は多く俗語を混ざるが故に、野鄙の調あることを免かれずと雖も、實境の委曲を盡すことに於ては、遠く他の文體の右に在り。この文



八大傳  
三十八年同法續  
事業  
大書十待長  
勅手在徳皇主秋  
皇旨ハ傳教老輩  
後由之ヲ評シ之  
ク傳ハ理想之至  
ト云ハ勿然ナリ  
上田秋成、大書  
ハ構造ニ於テ  
親トシテナリ

専心し、遂に近世第一の小説家となりぬ。著はすどころ二百六十餘種中、南總里見八犬傳、椿説弓張月、夢想兵衛蝴蝶物語、三七全傳、南柯夢等最も有名なり。ことに八犬傳、弓張月等の構造の偉大なること前後比なし。蓋し馬琴は、其文章も頗る縦横自在なれども、其構造の複雑にして、極めて變化に富み、而して統一に巧なることは、其絶大の名譽を得たる主因なり。

山東京傳は、姓名を岩瀬醒といふ。江戸の商家に生れ、専ら戯作を以て業となしぬ。著はすどころ二百五十餘種、就中、稻妻表紙、本朝醉菩提等最も著はる。柳亭種彦は、幕府の士にして、高屋知久といふ。傍ら戯作に従事して、著はすどころ修紫田舎源氏以下九十餘種あり。二人の文、皆平易にして流麗、其名聲亦馬琴に亞ぐ。

式亭三馬は、江戸の人にして、菊池泰輔といひ、十返舎一九は、重田貞一といひ、駿河小後の人にして、出で、江戸に住しぬ。二人殆んど時を同りして、文化文政の頃に出で、又ともに滑稽諷諷を以て鳴る。而して一九が道中膝栗毛は、三馬の浮世風呂、浮世床等よりも稍有名なれど、其眞の技量に至りては、三馬却つて一九の上何れも修長カヤレに在るが如し。爲永春水は、姓名を佐々木貞高といふ。又江戸の人なり。此時代の末葉、淫靡風をなすに乗じて、古の洒落本の跡をつぎて、卑猥なる人情本を作りしかば、一時世間に喧傳せられて、梅曆等の書、廣く行はれしかど、其文は平凡、其想は陳腐、絶えて取るべきなし。天保年中、風俗壞亂の故を以て、其著書の絶版を命ぜらる。手錠春水ハ狂訓年ハ辨スを下ラセ、遂ニ散在シテナリ

過ぎて善きは親の意見、悪しきは酒俗つれ

井原西鶴

新春の御吉慶、何方も御同前の中、今年正月が仕納の親仁にも、若うならしやりましたと、定つた口上を、互に謂ひすて、通る、方々の御盃飲まぬ様なれど、目出度申納むる

修紫田舎源氏  
活人物語多備名時  
代々々々作、作、作  
ハナリ

三馬、長所、  
種家、構、  
筆、毎、歌、捷

一九、長所  
文章、其、對、敵、物、  
多、狂、歌、狂、何、の、文、  
事、ナリ  
十返舎一九、  
亦、時、御、正、月、近、江、  
其、分、傳、傳、ま、し、時、  
三、九、語、百、時、時、  
國、海、し、四、時、  
何、事、ハ、下、レ、ト、云、  
ヒ、レ、ハ、其、初、人、評、シ、  
ヒ、テ、時、御、正、月、近、江、  
傳、不、迷、マ、シ、シ、  
九、厚、風、衰、ト、云、腹、  
腹、ア、レ、ハ、時、御、正、月、  
若、者、愛、シ、テ、説、ク、  
多、時、ト、ナリ

所で押へられ、重ね、祝はれ日頃解飲はといふさへ、はや理も聞かず、肩衣が臂に懸るやら、袴の腰が曲むやら、扇は那邊で遺したか、雪踏を踏替へ、溝に踏かぶり、禮にゆかいでも苦しからぬ所へ行きて、二三年前の御力落を弔ひ、善からぬ事のみ盡して、今朝の七ツに出で、夕の黄昏まで通り歩き、跣足なる方に草履はきて、鼻紙まで失ひ、逆鬢になり、博奕に打ち巻けたる體して、如鷺狸と歸り、正月早々から、醉覺の機嫌悪しく、冷水四五盃息急しく飲むと、あたりあいの枕引き寄せ、大軒して、一日の醉狂夢にや見るらむ。然るに、此親仁たる人は、格別の思入、常々子どもに言ひ含めらるゝは、我無常時、到りて、臨終の時節急なる時には、言ふ事も難からむ、別の仔細なし、唯酒を禁めて、月忌命日の齋非時にも、固く酒鹽の入りたる料理する事なく、家の内には、壺平皿の蓋も、盃に似たる物を置かず、門に禁酒の札を石に彫りて、建つべし。此言遺より外なし。昨日も日暮小太夫が説教を聞けば、あれほど力も強く、利發なる小栗殿も、横山に盛殺され給ふ、何を見ても聞いても、己のいふ事に違ふ事はあるまじ、されども兼好とやらいふ者が、若き者の諺に、下戸ならぬこそ、異なことを書いていひならはせぬ。未だ生きて居らば、公事をしてなりとも、只置かじと思へど、今は亡き後の記念の草紙、聞くさへ疎まし、此頃近所に酒宴があるやら、頭痛がしてと、纏めら

る、顔色も合點がいたかと思ふ。尻眼づかひ、身の毛よだちて嫌ながら、聽きたるが、今金言となりて、よく聞入れたる驗に、二番目に生れながら、確なる親の跡を踏まへ、俵の數藏に積みて、金袋を擔げさせ、いふ事に槌のきくも、炮烙頭巾を被りて、異見たらしく、謂はれし親仁の御蔭、過分至極なり。兄に生れたる者は、世間からも、親の眼鏡に外れし者と、心ある人には鼻であいしらは、交疎くなりゆけば、類をもつて集まる男酒一杯飲めば、其日の榮耀之に過ぎずと、面々の務むべき事解るのみならず、其心からの慰事、一つも真からぬ企、手を懐に入れて世を渡る才覺種々、恐ろしき事ども、現世後生ともに取り失ひ、たつた今の事、見るやうな。

墨田河に文吾船を逐ふ (八犬傳)

こゝは、武藏と下總の堺川とぞ名にしおふ、その水上は、適なる秩父の山より流れ來て、末果しなき海となる、坂東一二の大河なるに、折しも降つゝきたる、皷月雨に、水嵩増して波高く、淺瀬は絶えてなきものから、岸に繋げる船もやあると、おなじ河原を、幾遍となくゆきつ戻りつせし程に、天ははかなくも明けはなれて、遙に聞ゆる人馬の足音塵埃を蹴立て、轟々たり、毛野、小文吾はこれを見て、追兵は既に近づきぬ、殺脱て陸をや走らん、又この河を渡さん歎とて、思はず水際に立在みたり、浩る處に千

住のかたより、流に随ふ柴船の、こなたの岸を離るゝこと僅に一反ばかりにして、棹  
 どり惱みたりけるを、毛野、小文吾は齊ヒトシツ一うち見て、天の祐と手を抗アけて、やよ雲時ま  
 て、便船せんこなたへ寄せよ、と招けども、頭をふりてぞ漕ぎてゆく。毛野は機キばやく  
 大に怒りて、憑むに聴かぬことやある。貸さずとも今借らんずと罵りながら、水際に  
 添うて、一町ばかり追躉れば、舟人はなほあざみ笑うて、棹とり收め、艦を推立て漕ぎひ  
 らかんとする程に、毛野は閃ヒラりと身を跳らして、一反許隔りたる舟へ、發動ハツダクと飛び入  
 りたり。舟人これに駭オドロき怒りて、棹カシ揺取て撃たんとするを物々しやと引外し、怯むとこ  
 ろを蹴キ仆して、足下に楚シと踏み居スえて、漕ぎ戻さんとて艦を推せども、箭よりも早き  
 出水の勢進退自由ならざれば、思ふにも似ず推流されて、川下遠くなりまさるを、小  
 文吾うち見て、雲時も得堪へず、諸肌袒ヌぎて、單衣の袖卷込めつゝ、兩刀を挿したる儘  
 に、水中へ跳り入り、抜手を切つて、滔トぎ着かんと早れども、流烈しく波高ければ、行徳  
 わたりの鹽濱シホに成長ヒトりたる水練も、遂に追ひ着くことを得ず、いとも難義に及びし  
 折から、物モノ幾イばか積登ツしたる大平駄の船一艘、千住のかたより漕來れり。小文吾は、辛  
 くして件の船の舷ヘに手をうち掛けて乗移れば、兩三箇の舟子共、駭オドロき騒ウぎ諸聲シヨウふり  
 立、この竊盜奴が、朝働アサきに米物せんと歟、不敵フテツさよ、打ウち括カれと罵りて、左右齊ヒトシツ一撃イツた

んとするを、小文吾はやく身を翻フして、兩三フタツミツ四ヨウ竿ソウ彼此アチコチへ遣違ヤリチガハしたる艦クニ櫂カシの正中ナカ諸手  
 に櫻オウみて振ヒぢ倒し、曳聲ヒキかけて奪ヒ取る、櫂カシ真額マカシに振り揚げて、撃ヒち拗ヒんと疾視ヒヤシへた  
 る、腕ウデに携ヒる一箇ヒトツの舟長ヒナ、慌オドロてたる聲戦ヒして、やよ喃ナ、古那屋コナヤの令郎リョウ公キミ且ナく怒イを鎮シめ  
 給へ、と勸解コトワつゝ、只管禁めけり。この人は誰ぞ、其は下回シモマに解分トクるを見て知らん。

(ち) 脚本、演劇の臺詞、舞臺の模様等を記したるものを脚本とい

ふ、前時代の狂言記と、體裁頗る相似たり。元祿の頃より漸く行はれ  
 し、寛延寶曆の頃より演劇の技大に進むにつれて、津打ツウ治兵衛チヘイ堀  
 越コシ菜陽サイヨウ、櫻田治助オウダチスケ、鶴屋南北ツルヤノホミ、並木五瓶ナミキイツ等の作者、相ついで輩出し、作る  
 ところ極めて多きがなかに、南北が四谷怪談、五瓶が金紋五山桐、五  
 大力等頗る有名なり。すべて是等の脚本の妙は、其構造の變幻極ま  
 りなきに在るが故に、簡短なる例を以て其巧を示し難し。

(は) 俳文、狂文、皆滑稽諷諷を以て成れる小品文にして、俳文は多  
 く俳諧師の手に成り、狂文は多く戯作者、狂歌師等の作るどころ、後



者は前者よりも野卑なるを常とす。

俳文は、芭蕉、支考、許六等、元祿の俳人にこれを能くするもの多く、はやく時を論ずる風俗文選等の書あれど、其最も見るべきは、寶曆頃の横井也有が鶉衣なり也。有は名を孫左衛門といふ、尾張の士なり。其文輕妙自在、滑稽を恣にして、絶えて卑俗に陥らず、蓋し滑稽文の上乗なるものなり也。有又俳諧を能くして、美濃風の名人と稱せらる。

狂文には、風來山人の六々部集最も著はる。風來は姓名を平賀源内といひ、又福内鬼外と號す。明和頃の人にして、奇才を抱きて用ゐられき。狂文、狂歌を假りて、其積憤を洩らしぬ。故に其文は、嘲世罵俗の氣に富めども、其詞藻の野卑なることは、一九三馬と伯仲の間に在り。其滑稽の才、亦これが上に出でず。其他、蜀山人、橋千蔭等も狂文に名あり。

俳文  
鶉衣  
四三

借物の辨 (編衣)

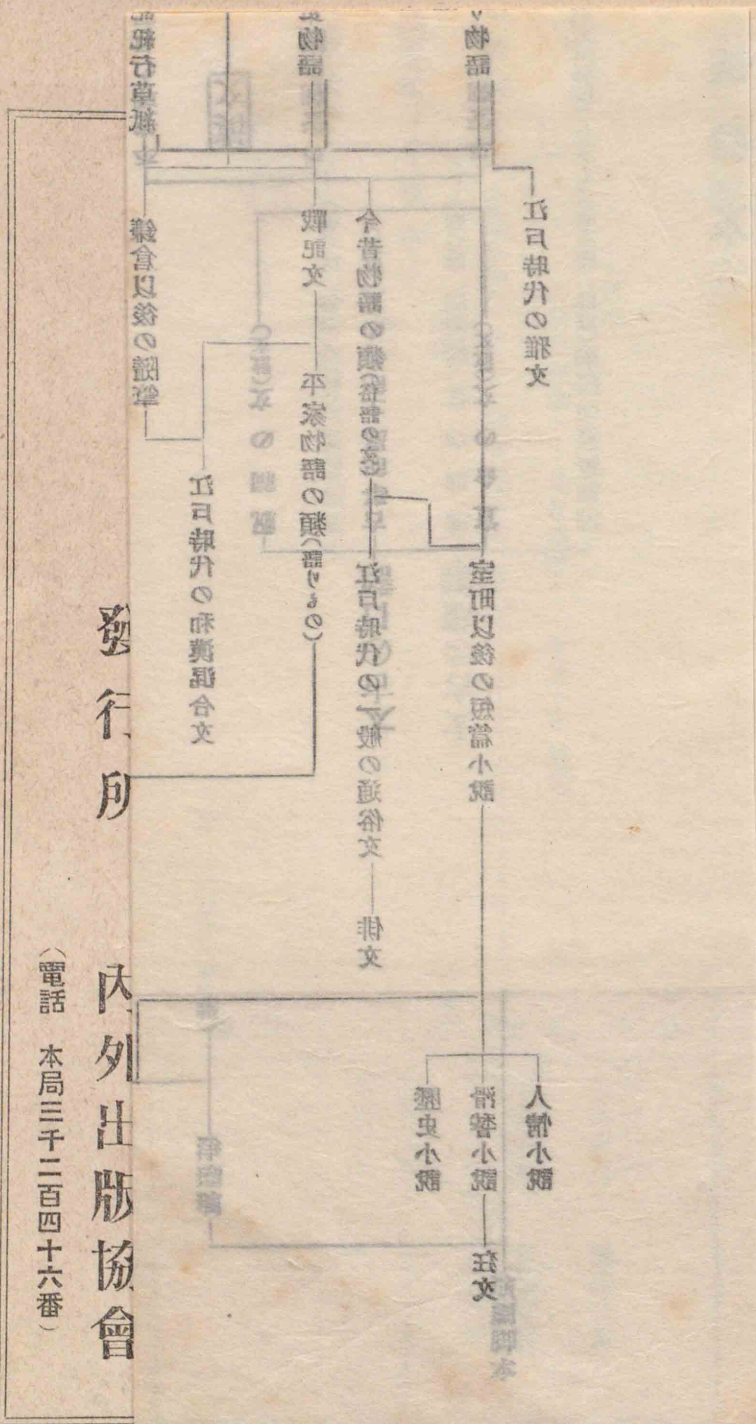
久方の月だに、日の光を借りて照れば、露また月の光を借りて、貫きとめぬ玉とも散るなり。昔何某の命の、このかみの釣針を借り給ひしより、まして人代に及んで、一切の道具を借るに、貸すものも互なれど、砥の挽臼のといへる類は、借すたびに脊低きく、鯉節は借りられて、瘦せて戻るこそあはれなれ。金銀ばかりは徳つきて戻れば、もと借ることの難きにはあらぬを、返すことこの難きより、今は借る事だにたやすからず。昔男ありて、身代もならの京春日の里に貸す人ありて、かりにいにけるより、やどどなき雲の上人も、かりにだにやは君はござらんと、露ふか草の深入し給へば、鬼のやうなる武士も、霜月頃よりは、地藏顔して人にたのむのかりがねは、尾羽うち枯らして、春來ても越路にもかへらず、假の宿に心とむなど、人をだに諫むる先達も、借らでは現世の立がたきにや、二季の臺所には、掛乞の衆生來りて、色衣の長老、これが爲に拜がみ給へば、又ある寺には有徳の智識ありて、これはこちから貸しつけて、きりの算用滞れば、貧なる檀方を呵責し給ふ。かれもこれも佛の御心にはたがふらんとぞねほゆる。そも顔子は陋巷にありて、いかきの飯、瓢箪酒に貧の樂を改めずとや。さるを今世の人々、借金カネの山なして、是を苦にすれば限なし、百までは生きぬ身を持って

さのみは心を悲しめんや、一寸さきは闇の夜々と、放言に腹うちたゝきて、我は貧に安んじたりなど、同じ貧樂の引きごとにいふは、遣る瀬なき心のはらへならめど、誠は雲水の間違なり、なべて世に在る人の、衣服調度をはじめて、人なみならぬは耻かしどて、其爲に金を借りて、世上の耻はつくらふらめど、人の物を借りて返さぬを耻ぢざるに同じ、かくいへる我も、借らぬにてはなし、貸す人だにあらば、誰とてもかりのうき世に、金銀道具はいふに及ばず、親かり養子も勝手次第にて、女房ばかりは借りひきのならぬ世の掟こそ、有り難きためしなれ。

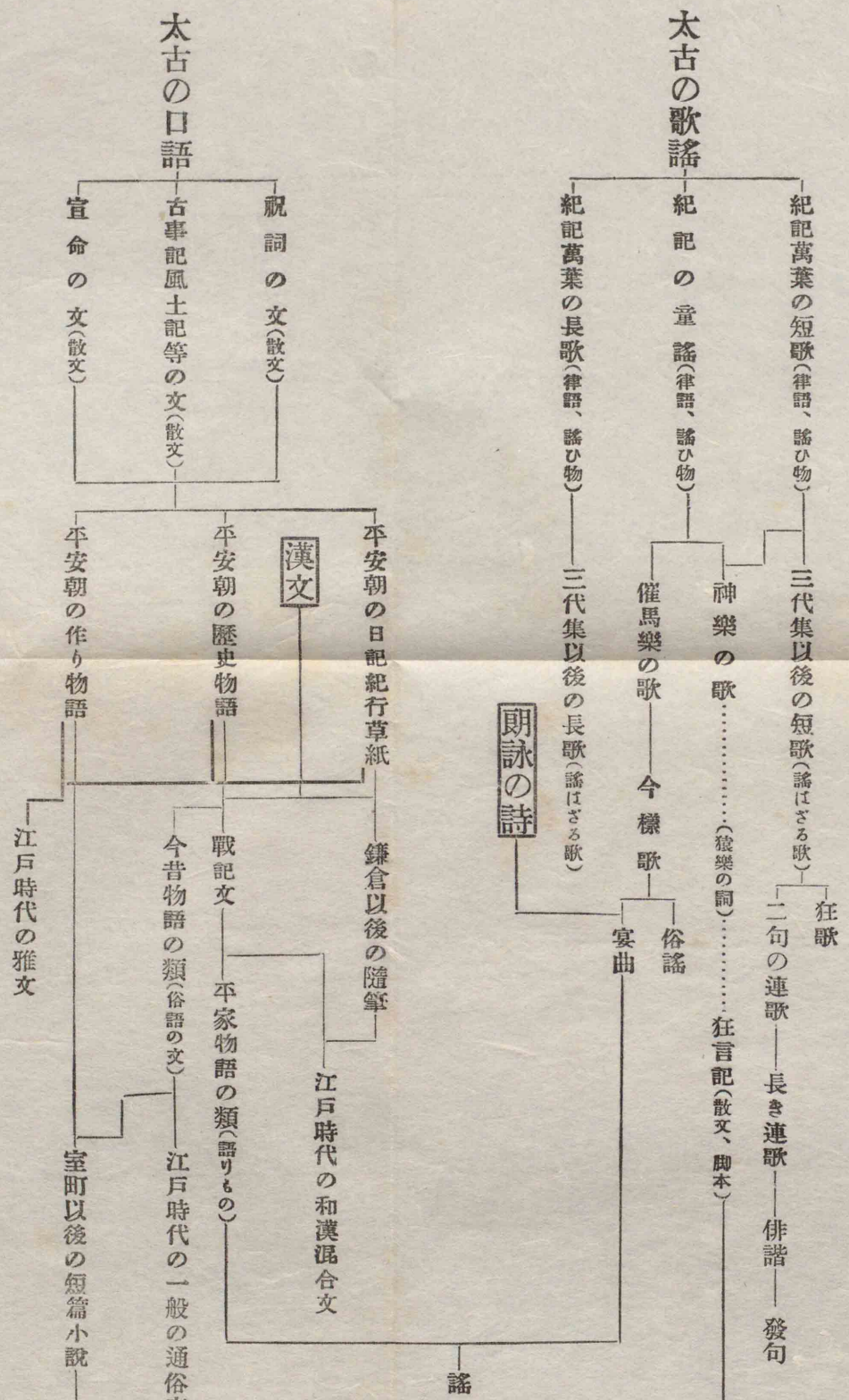
借る人の手によごれけり、金銀花。

### 日本文学史要 終

(日本文学史要 表の一)

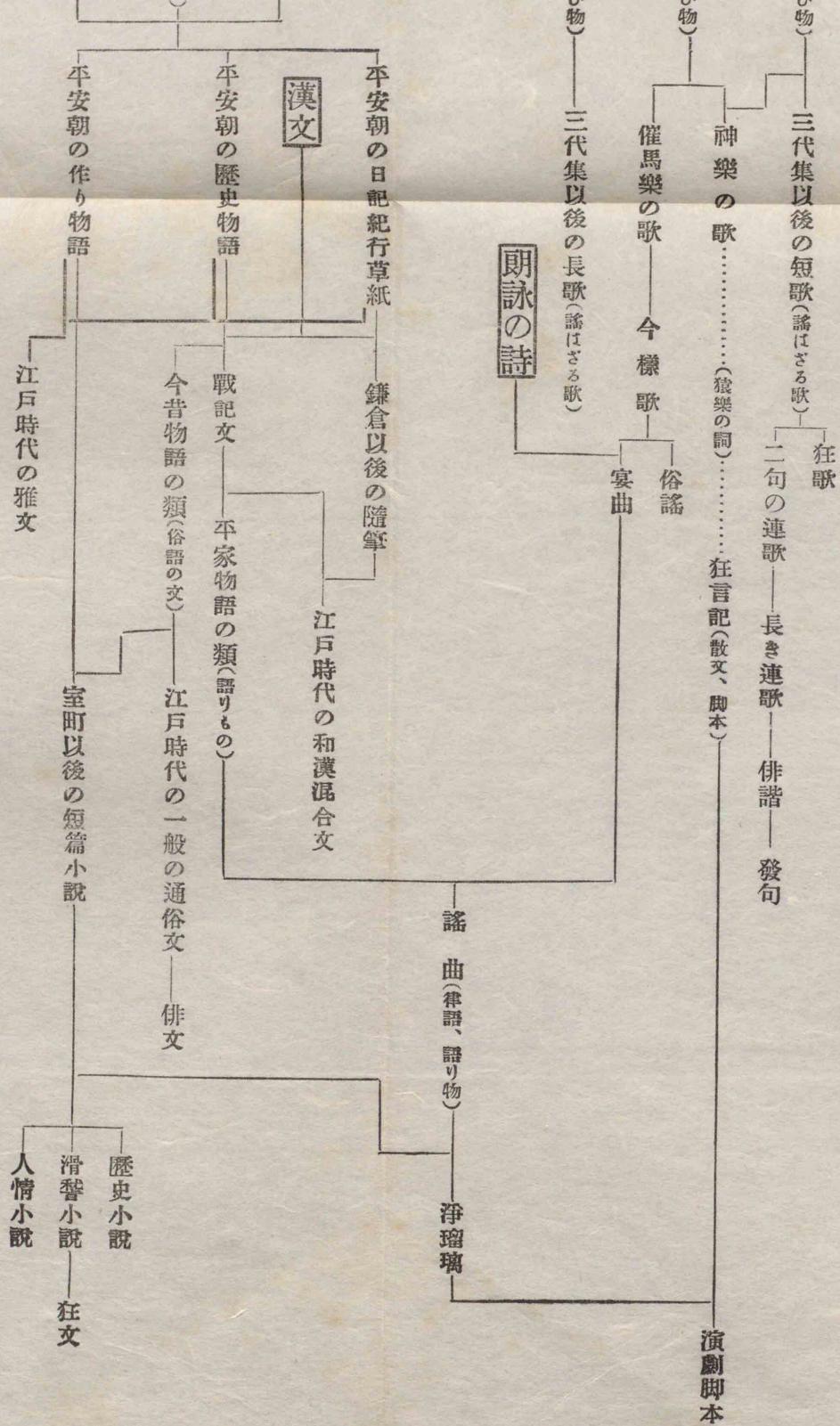


文體變遷の略表



日本文學史要 終

文體變遷の略表



（日本文學史要 表の二）

時代文學略表 (注意)

流行文學には、甚だしく流行したるものを先にし、有名なる文學及び文學者には、重要なるものを先にせり。

奈良朝	貴賤皆歌謡を嗜む 漢學佛教の渡來及び流行 片假名の發明	最も流行したる文學の種類 短歌 長歌 (漢詩文)	最も有名なる文學 萬葉集 古事記 祝詞 宣命	最も有名な 柿本人麿 大伴家持
平安朝	平假名の發明 漢學佛教の思想漸く國文に入る 貴族社會文學を專有す 婦女文學の流行	短歌 物語 語 (漢詩文)	源氏物語 枕草紙 三代集 伊勢物語 竹取物語 土佐日記 大鏡 榮華物語	紫式部 紀貫之 藤原俊成
鎌倉時代	武家思想文學に入る 國文漢文の調和漸く起る 文學漸く衰色あり	戰記文	源平盛衰記 平家物語 新古今集 方丈記 山家集 金槐集	藤原定家 僧西行 源實朝
室町時代	文學僅かに僧侶の手に残る 下層文學漸く起らんとす	謡曲 連歌	謡曲 徒然草 太平記 正統記 狂言記 菟玖波集 草庵集	吉田兼好 僧宗祇
江戸時代	漢學隆盛 國文漢文の調和成る 古學復興 俗文學流行	和漢混合文 俳諧 小説 戯曲 長歌 俗謡 (漢詩文)	藩翰譜 近松の淨瑠璃 八犬傳 古事記傳 縣居歌集 桂園一枝 琴後集 芭蕉七部集	新井白石 本居宣長 加茂真淵 香川景樹 松尾芭蕉



山家集 古今集 萬葉集 古今和歌集 古今物語集 古今談海	西行 寂蓮 道鏡 道長 道隆 道深 道賢 道俊 道雅 道成 道長 道隆 道深 道賢 道俊 道雅 道成	東 鑑	山家集 古今集 萬葉集 古今和歌集 古今物語集 古今談海	山家集 古今集 萬葉集 古今和歌集 古今物語集 古今談海	山家集 古今集 萬葉集 古今和歌集 古今物語集 古今談海
---	--	--------	---	---	---

此書は文學史の要典として、編輯されるべきものである。其の編輯は、本書の編輯者である佐々政一、山縣悌三、白土幸力、三光堂の諸氏が、それぞれ専門の知識と、熱心な研究を以て、その編輯にあつた。其の結果、本書は、文學史の要典として、編輯されるべきものである。

明治三十一年十月五日印刷  
 明治三十二年二月九日訂正再版印刷  
 明治三十二年二月九日訂正再版印刷  
 明治三十四年三月二十五日第三版發行  
 明治三十六年三月二十五日第四版發行

\*\*\*\*\*  
 日本文學史要典附  
 \*\*\*\*\*  
 定價金五拾錢  
 \*\*\*\*\*

# 版權所有

著者 佐々 政一

發行者 山縣 悌三 郎

印刷者 白土 幸力

印刷所 三光 堂

發行所

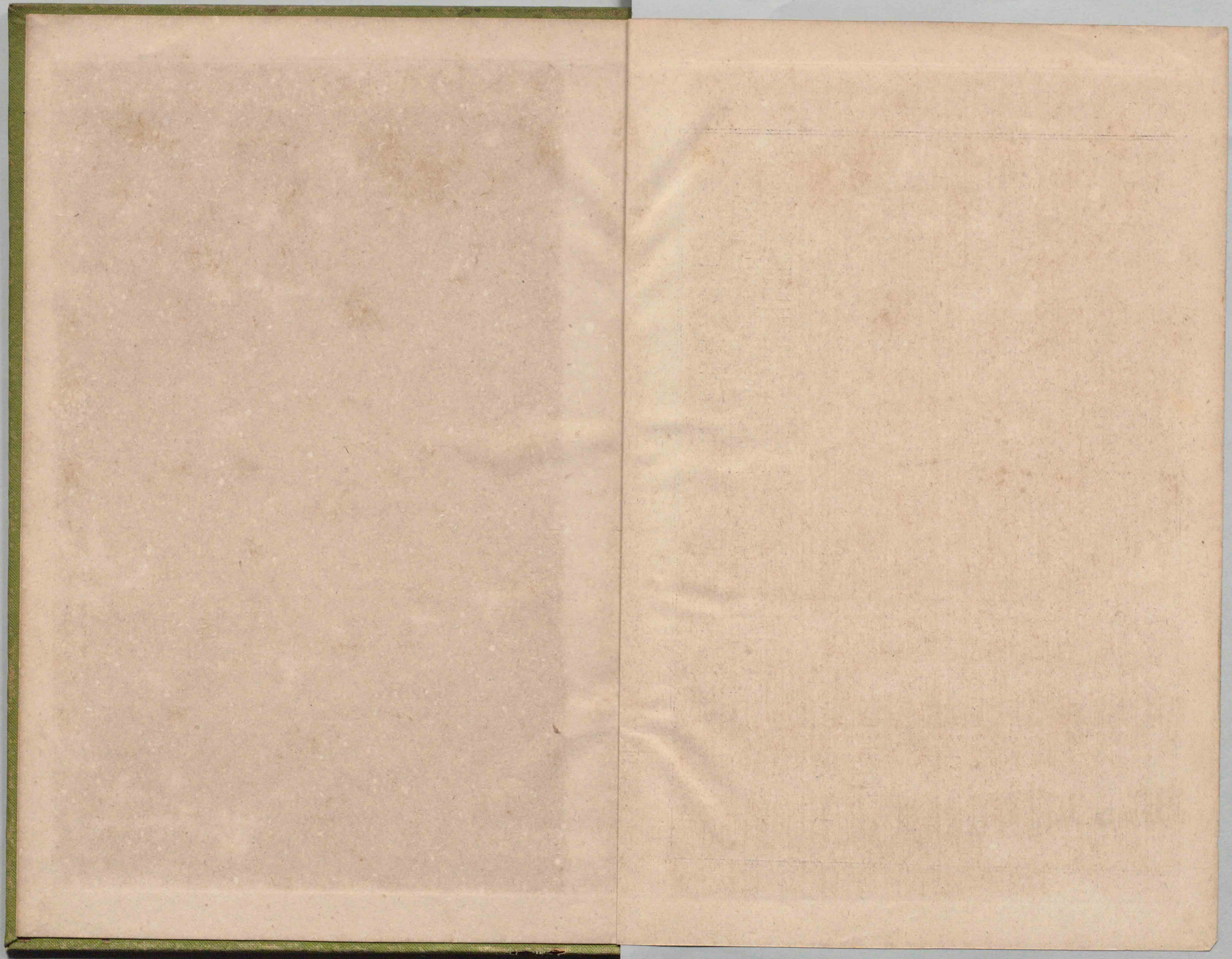
內外出版協會

（電話 本局三千二百四十六番）

東京市神田區南甲賀町八番地

東京市神田區美土代町二丁目一番地

東京府北豐島郡葉町大字上駒込  
 拾八及拾九番地







広島大学図書

2000089511

